

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成30年6月28日
【事業年度】	第69期（自平成29年4月1日至平成30年3月31日）
【会社名】	大豊建設株式会社
【英訳名】	DAIHO CORPORATION
【代表者の役職氏名】	代表取締役 大隅 健一
【本店の所在の場所】	東京都中央区新川一丁目24番4号
【電話番号】	03(3297)7002
【事務連絡者氏名】	執行役員 管理本部経理部長 釘本 実
【最寄りの連絡場所】	東京都中央区新川一丁目24番4号
【電話番号】	03(3297)7002
【事務連絡者氏名】	執行役員 管理本部経理部長 釘本 実
【縦覧に供する場所】	大豊建設株式会社東関東支店 （千葉県千葉市中央区本千葉町10番5号） 大豊建設株式会社名古屋支店 （愛知県名古屋市中村区角割町5丁目7番地の2） 大豊建設株式会社大阪支店 （大阪府大阪市中央区博労町2丁目2番13号） 株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号）

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第65期	第66期	第67期	第68期	第69期
決算年月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
売上高 (百万円)	126,416	138,525	146,815	143,613	149,649
経常利益 (百万円)	2,536	6,302	9,205	10,131	11,248
親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	1,864	4,616	5,554	7,037	7,883
包括利益 (百万円)	2,027	5,224	5,447	7,580	8,714
純資産額 (百万円)	24,646	31,780	42,626	49,981	57,908
総資産額 (百万円)	96,535	109,185	117,353	129,232	141,115
1株当たり純資産額 (円)	325.42	418.11	485.48	567.98	659.30
1株当たり当期純利益 (円)	27.92	61.67	67.18	81.53	91.25
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	-	61.45	66.54	80.75	90.05
自己資本比率 (%)	25.2	28.7	35.7	37.9	40.4
自己資本利益率 (%)	8.4	16.6	15.2	15.5	14.9
株価収益率 (倍)	13.5	10.0	7.3	6.8	6.5
営業活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	4,005	6,042	14,890	2,062	15,010
投資活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	400	507	1,146	1,621	1,480
財務活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	2,406	3,113	1,712	496	874
現金及び現金同等物の期末残高 (百万円)	18,558	16,235	31,633	31,592	44,232
従業員数 (人)	1,500	1,505	1,516	1,563	1,601

(注)1. 売上高には、消費税等は含まれていない。

(注)2. 第65期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、希薄化効果を有している潜在株式が存在しないため記載していない。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第65期	第66期	第67期	第68期	第69期
決算年月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
売上高 (百万円)	84,500	97,809	102,299	99,295	106,452
経常利益 (百万円)	1,591	4,343	6,123	6,369	7,673
当期純利益 (百万円)	1,208	3,246	3,637	4,868	5,555
資本金 (百万円)	6,321	6,321	9,030	9,030	9,039
発行済株式総数 (千株)	75,670	75,670	87,170	87,170	87,210
純資産額 (百万円)	22,488	27,714	36,521	41,578	47,001
総資産額 (百万円)	70,952	86,472	90,390	100,164	110,095
1株当たり純資産額 (円)	300.37	367.82	418.41	474.59	537.43
1株当たり配当額 (円)	2.00	3.00	5.00	9.00	15.00
(うち1株当たり中間配当額)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
1株当たり当期純利益 (円)	18.09	43.36	44.00	56.40	64.31
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	-	43.21	43.58	55.86	63.47
自己資本比率 (%)	31.7	31.8	40.0	40.9	42.2
自己資本利益率 (%)	6.0	13.0	11.4	12.6	12.7
株価収益率 (倍)	20.8	14.3	11.1	9.8	9.3
配当性向 (%)	11.1	6.9	11.4	16.0	23.3
従業員数 (人)	880	891	914	936	963

(注) 1 . 売上高には、消費税等は含まれていない。

(注) 2 . 第65期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、希薄化効果を有している潜在株式が存在しないため記載していない。

## 2【沿革】

昭和24年3月 旧満州国の大豊満ダムの建設に参画した技術陣を中心とし、その他満州、台湾及び朝鮮等の外地で活躍した土木、建築技術者を糾合し、資本金500万円をもって大豊建設株式会社を設立。爾後、建設業者として広く、土木・建築の業務に従事している。

昭和24年9月 建設業法制定による建設業者登録。

昭和27年3月 大豊式潜函工法の特許登録。

昭和31年8月 大豊塗装工業株式会社（子会社）を設立。

昭和37年2月 東京証券取引所市場第二部へ当社株式を上場した。

昭和38年7月 大阪支店設置、以後業容の拡大に伴い全国に亘る営業の基盤を固めるため、昭和39年4月仙台支店、名古屋支店、昭和39年10月新潟支店、昭和42年6月札幌支店、広島支店、昭和44年8月横浜支店、昭和45年12月福岡支店を開設した。

昭和44年9月 大豊不動産株式会社（子会社）を設立。

昭和46年1月 ドルフインドック工法の特許登録。

昭和47年8月 当社株式が東京証券取引所市場第一部へ指定された。

昭和47年8月 東京都中央区新川一丁目に地下1階地上8階の新社屋完成、本社を移転した。

昭和47年12月 宅地建物取引業者免許を取得、免許証番号東京都知事(1)第23310号。

昭和48年12月 建設業法改正に伴い特定建設業許可を受けた。  
許可番号建設大臣許可（特 - 48）第2520号。

昭和50年4月 黒岩石材工業株式会社を設立。

昭和56年6月 東京支店開設。

昭和59年4月 新潟支店を北陸支店に改称。

昭和59年6月 タイ大豊株式会社（子会社）を設立。

昭和59年11月 泥土加圧シールド工法の特許登録。

昭和62年4月 D O T工法（多連形泥土圧シールド工法）の特許登録。

昭和63年4月 進和機工株式会社（子会社）を設立。

昭和63年9月 タイ大豊商事株式会社（子会社の子会社）を設立。

平成3年4月 札幌支店、仙台支店及び福岡支店を夫々北海道支店、東北支店及び九州支店に改称。

平成4年11月 偏心多軸（D P L E X）シールド工法の特許登録。

平成5年10月 D R E A M工法（ニューマチックケーソン無人化システム工法）の特許登録。

平成7年6月 神戸支店開設。

平成8年2月 マダガスカル大豊株式会社（子会社）を設立。

平成11年3月 I S O 9001を全支店認証取得。  
創立50周年を迎えた。

平成12年10月 四国支店開設。

平成13年3月 I S O 14001を本支店一括認証取得。

平成14年9月 N e w D R E A M工法の特許登録。

平成16年3月 黒岩石材工業株式会社が旧株式会社森本組より営業譲渡を受け、株式会社森本組に改称。

平成19年12月 神戸支店を神戸営業所に改称。

平成20年12月 四国支店を四国営業所に改称。

平成21年3月 創立60周年を迎えた。

平成23年4月 東関東支店開設。

平成30年4月 東京支店を東京土木支店と東京建築支店に再編。

### 3【事業の内容】

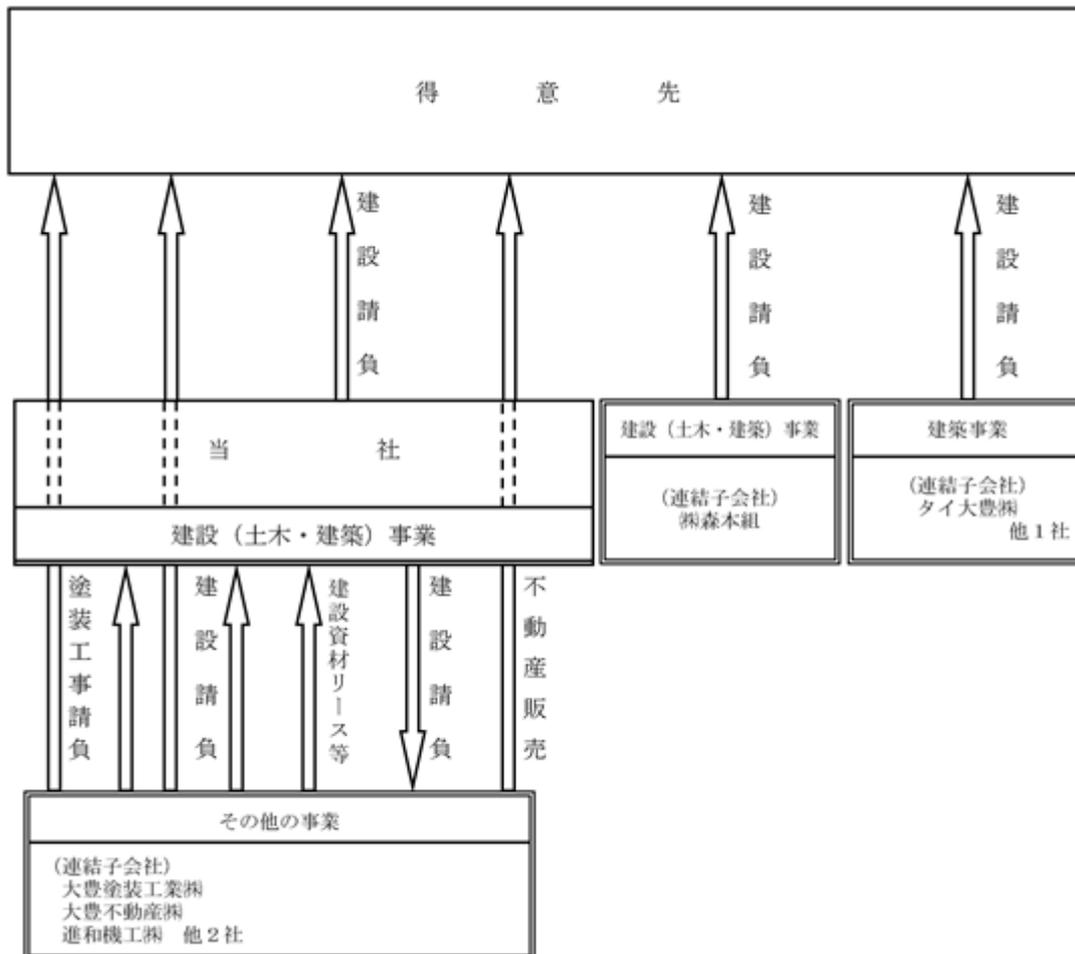
当社のグループ（当社及び子会社）は、当社（大豊建設株式会社）及び子会社10社（内4社は間接所有によるもの）で構成され、建設事業を主たる業務としている。

当社グループの事業に係わる位置付けは次のとおりである。

なお、次の3部門は「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1)連結財務諸表 注記事項」に掲げるセグメント情報の区分と同一である。

- （土木事業） 当社は、建設事業のうち土木事業を営んでおり、子会社である㈱森本組が土木事業の施工及び施工協力を行っている。
- （建築事業） 当社は、建設事業のうち建築事業を営んでおり、子会社である㈱森本組が建築事業の施工及び施工協力を、タイ大豊㈱（タイ王国）が建築事業を行っている。
- （その他の事業） 子会社である大豊不動産㈱が不動産事業を、大豊塗装工業㈱が塗装工事業を、進和機工㈱が建設資材リース業等を営んでいる。

事業の系統図は次のとおりである。



4【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	事業の内容	議決権の所 有割合 (%)	関係内容
(連結子会社) 株森本組 (注)2・4	大阪府中央区	2,000	土木事業 建築事業	100.0	当社より工事の受注をして いる。 役員の兼任あり。
大豊塗装工業株 (注)3	東京都台東区	96	その他の事業	99.7 (65.4)	当社より工事の受注をして いる。 役員の兼任あり。 資金援助あり。
大豊不動産株	東京都中央区	10	その他の事業	100.0	当社への工事の発注をして いる。 役員の兼任あり。 資金援助あり。
進和機工株	茨城県 つくばみらい市	50	その他の事業	100.0	当社への建設資材の賃貸 及び販売をしている。 資金援助あり。
その他4社					

- (注)1.「事業の内容」欄には、セグメントの名称を記載している。  
 2.特定子会社に該当する。  
 3.議決権の所有割合の( )内は、間接所有割合で内数を記載している。  
 4.株森本組については売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く)の連結売上高に占める割合が10%を超えている。

主要な損益情報等	(1) 売上高	38,002	百万円
	(2) 経常利益	3,574	
	(3) 当期純利益	2,436	
	(4) 純資産額	11,295	
	(5) 総資産額	31,388	

## 5【従業員の状況】

### (1) 連結会社の状況

平成30年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数(人)
土木事業	612
建築事業	493
その他の事業	198
全社(共通)	298
合計	1,601

(注) 従業員数は就業人員である。

### (2) 提出会社の状況

平成30年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
963	44.9	19.4	7,546,934

セグメントの名称	従業員数(人)
土木事業	407
建築事業	340
その他の事業	-
全社(共通)	216
合計	963

(注) 1. 従業員数は就業人員である。

2. 年間平均給与は、諸手当及び賞与を含んでいる。

### (3) 労働組合の状況

大豊建設労働組合と称し、昭和44年12月21日に結成され、平成30年3月31日現在の組合員数は590名である。本組合は建設業職員組合の協議会組織である「日本建設産業職員労働組合協議会」に加盟しているが、労使関係においても結成以来円満に推移しており特記すべき事項はない。

## 第2【事業の状況】

### 1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

当連結会計年度におけるわが国経済は、海外経済の緩やかな成長のもと、緩和的な金融環境や政府の各種政策により、企業収益及び雇用・所得環境が改善し緩やかな回復基調が続いた。

今後の我が国経済の見通しとしては、きわめて緩和的な金融環境や政府の経済対策を背景に企業収益及び個人所得が改善し、経済の好循環が持続すると見込まれる。また、オリンピック関連投資の本格化などによる企業の設備投資や雇用・所得環境の改善による個人消費も増加基調が続くと思われる。

ただし、米国の経済政策の動向や地政学的リスクなど世界経済に与える不確実性には留意する必要があると考えられる。

建設業界においては、政府建設投資は減少傾向が続くと見込まれるが、都市部における雨水対策などの防災・減災事業や社会インフラ設備の老朽化対策事業などへの投資が高水準で維持されると見込まれる。また、民間建設投資においては、先行きの不透明感はあるが、土木インフラ系企業の設備投資や東京オリンピック・パラリンピックを見込んだ投資を中心に、緩やかな回復が継続すると見込まれる。

なお、以前より不安視されている技術者・技能労働者不足や労務・資材費の上昇は工事進捗に影響を及ぼすおそれがあり、今後も動向を注視する必要があると思われる。また、作業所の週休二日制の実施や時間外労働の削減など働き方改革を推進し、現場技術者や技能労働者の労働環境の改善に努めていく必要もあると思われる。

このような環境の下、当社は平成29年度を初年度とする中期経営計画に基づき、「創業の精神に則り技術力を持続的発展の礎とし、技術力に裏打ちされた収益力の強化と資本政策の充実により企業価値を向上させ、すべてのステークホルダーにとって魅力ある企業を目指す。」を中長期の経営ビジョンとし、独自技術の高度化及び実効性のある技術の開発に取り組むとともに、持続的成長に不可欠な人的経営資源を確保し、安定的な収益構造の確立を目指す所存である。

具体的には土木事業戦略として、得意技術をはじめとする技術開発の強化により、競争力及び生産性の向上を図り、市場環境、優位性、収益性を考慮した地域選択と人的資源の効率的な投入により営業力と収益力の強化を目指す。

建築事業戦略としては、首都圏エリアを最も注力すべき市場と位置付け、多様な工法への対応を強化することで非住宅部門の競争力を向上させるとともに省力化技術の確立・提案、ICT技術の導入等、生産性の向上に取り組み、営業力と収益力の強化を目指す。

また、人的資源確保の観点から、社員の能力開発、教育・育成、待遇改善及び「働き方改革」に取り組むとともに、経営の最重要施策として財務体質の充実と株主の皆様に対する安定配当の維持に努める所存である。

なお、平成29年12月8日に公表した当事業所における不正取引問題に関し、当社と利害関係のない弁護士等からなる第三者調査委員会を設置し、当該不正取引に対する会社調査の妥当性の検証及びその他同種事項の有無の調査を実施した。

調査の結果、複数の事業所で特定の協力業者に対し架空発注が行われ、一部不適切な会計処理が行われていることが判明した。

当社はこの調査結果を真摯に受け止め、内部監査部門の強化と透明性のある人事評価制度を柱とした再発防止策を策定した。今後はコンプライアンスを徹底し、役職員が一丸となって信頼回復に取り組む所存である。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものである。

## 2【事業等のリスク】

以下に、当社の事業展開その他に関してリスク要因となる可能性があると考えられる主な事項を記載している。また、必ずしもそのようなリスク要因に該当しない事項においても、投資判断上重要であると考えられる事項については、投資家に対する積極的な情報開示の観点から記載している。

なお、当社はこれらのリスク発生の可能性を認識した上で、発生の回避及び発生した場合の対応に努める方針であるが、当社株式に対する投資判断は、以下の記載事項及び有価証券報告書等の記載事項を、慎重に検討された上で行われる必要がある。また、以下の記載は本株式への投資に関連するリスクをすべて網羅するものではないので、この点に留意する必要がある。

なお、文中の将来に関する事項は、本有価証券報告書提出日現在において、当社グループ（当社（大豊建設株式会社）及び子会社10社（内4社は間接所有によるものである）をいう。以下同じ。）が判断したものである。

### 1．建設業を取り巻く環境の変化によるリスク

#### (1) 事業環境の変化

公共工事費の大幅な削減、国内外の景気後退等による建設需要の大幅な縮小等、建設業に係る著しい環境変化が生じた場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性がある。

#### (2) 公共工事低入札に伴う完成工事総利益の減少

今後も公共工事の入札における他社との競合が継続して激化し、低入札が繰り返されることになれば、事業利益の大きな割合を占める官庁工事総利益に影響を及ぼす可能性がある。

#### (3) 労務費・資機材費の高騰

労務費及び主要な資材費が上昇することにより建設コストの増加により利益が減少する可能性がある。

#### (4) 取引先等の信用リスク

取引先の業績等の悪化により工事代金の回収や工事の遅延等が発生し、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性がある。

#### (5) 海外工事に伴う為替差損の発生、想定外のカントリーリスクの発生

海外工事に、為替の変動による損失が発生する可能性がある。また、事前の想定を超えるカントリーリスクの発生による損失が発生する可能性があり、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性がある。

### 2．人材確保についてのリスク

公共事業批判の風潮や建設業という業種に対するイメージから優秀な人材の確保が困難になる恐れがある。

### 3．法規制等に関するリスク

工事施工に伴い、第三者事故や労働災害を発生させた場合等、建設業法、安全衛生法上の罰則及び工事発注機関からの指名停止措置などが重複して行われ、工事受注機会を逃す可能性がある。

### 4．瑕疵の発生によるリスク

完成マンション戸数の増大、及び住宅の品質確保の促進等に関する法律による瑕疵担保期間の長期化等により、補修費用が増加する可能性がある。

### 5．訴訟等のリスク

現在係争中や訴訟中の案件において、当社グループの主張が予測と異なる結果となった場合は、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性がある。

### 6．自然災害等のリスク

地震、津波、風水被害等の自然災害や感染症の大流行が発生した場合には、従業員や保有資産に損害を受け、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性がある。また、重大な事故が発生した場合にも同様に影響を及ぼす可能性がある。

### 7．資産保有によるリスク

当社グループは、事業用及び賃貸用不動産としての不動産並びに有価証券等を所有しているが、時価の変動等により減損処理の必要性が生じた場合は、当社グループの経営成績及び財政状態等に影響を及ぼす可能性がある。

### 3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

#### (1)経営成績等の状況の概要

##### 財政状態及び経営成績の状況

当連結会計年度におけるわが国経済は、海外経済の緩やかな成長のもと、緩和的な金融環境や政府の各種政策により、企業収益及び雇用・所得環境が改善し緩やかな回復基調が続いている。

当社グループの主要事業である建設業界においては、公共投資は減少傾向にあるが底堅く推移し、民間設備投資は企業の設備投資を中心に前年を上回る水準で推移し全体的に堅調な収益環境が継続した。

このような情勢下において、当社の企業グループを挙げて積極的な営業活動を行った結果、連結受注高においては154,289百万円（前期比9.6%減）となった。うち、当社受注工事高においては、土木工事で60,983百万円（前期比15.2%減）、建築工事で53,086百万円（前期比6.6%減）、合計114,070百万円（前期比11.4%減）となった。なお、官民別比率は、官公庁工事56.7%、民間工事43.3%である。

また、連結売上高においては149,649百万円（前期比4.2%増）となった。うち、当社完成工事高においては、土木工事で52,099百万円（前期比0.3%減）、建築工事で54,353百万円（前期比15.5%増）、合計106,452百万円（前期比7.2%増）となった。なお、官民別比率は、官公庁工事53.1%、民間工事46.9%である。

利益面においては、原価の低減と経費の節減を推し進めた結果、連結で経常利益11,248百万円（前期比11.0%増）、親会社株主に帰属する当期純利益7,883百万円（前期比12.0%増）という結果になった。うち、当社の経常利益で7,673百万円（前期比20.5%増）、当期純利益で5,555百万円（前期比14.1%増）という結果になった。

セグメント別の業績は次のとおりである。

土木事業においては、売上高は73,928百万円（前期比1.6%減）、営業利益7,283百万円（前期比18.3%増）となった。

建築事業においては、売上高は71,519百万円（前期比9.5%増）、営業利益3,764百万円（前期比0.5%減）となった。

その他の事業においては、売上高は4,201百万円（前期比32.2%増）、営業利益250百万円（前期比127.5%増）となった。

##### キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度のキャッシュ・フローについては、営業活動により15,010百万円増加し、投資活動により1,480百万円減少し、財務活動により874百万円減少し、この結果、現金及び現金同等物（以下、「資金」という。）は12,639百万円の増加となり、当連結会計年度末残高は44,232百万円（前期比40.0%増）となった。

当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりである。

#### (営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動の結果獲得した資金は、純額で15,010百万円（前期比627.8%増）となった。これは主に、税金等調整前当期純利益の計上11,193百万円、売上債権の減少1,294百万円、仕入債務の増加2,723百万円等による資金の増加、法人税等の支払額2,668百万円等による資金の減少があったことによるものである。

#### (投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動の結果使用した資金は、純額で1,480百万円（前期比8.7%減）となった。これは主に、有形固定資産の取得による支出1,879百万円等による資金の減少によるものである。

#### (財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動の結果使用した資金は、純額で874百万円（前期比76.2%増）となった。これは主に、配当金の支払額774百万円等による資金の減少によるものである。

生産、受注及び売上の実績

a. 受注実績

セグメントの名称	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日) (百万円)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日) (百万円)
土木事業	94,590	81,301
建築事業	74,843	71,436
その他の事業	1,217	1,551
合計	170,651	154,289

b. 売上実績

セグメントの名称	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日) (百万円)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日) (百万円)
土木事業	75,141	73,928
建築事業	65,294	71,519
その他の事業	3,177	4,201
合計	143,613	149,649

(注) 1. 上記の金額には、消費税等は含まれていない。

2. 当社グループでは生産実績を定義することが困難であるため、「生産の状況」は記載していない。

3. 当連結会計年度において売上高総額に対する割合が100分の10以上の相手先はない。

なお、参考のため提出会社個別の事業の状況は次のとおりである。

建設業における受注工事高及び施工高の状況

受注工事高、完成工事高、繰越工事高及び施工高

第68期(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

工事別	期首 繰越工事高 (百万円)	期中 受注工事高 (百万円)	計 (百万円)	期中 完成工事高 (百万円)	期末繰越工事高		期中施工高 (百万円)	
					手持工事高 (百万円)	うち施工高 (百万円)		
土木	83,805	71,918	155,724	52,237	103,486	% 0.4	370	52,326
建築	58,492	56,836	115,329	47,058	68,271	0.7	446	47,142
計	142,298	128,755	271,053	99,295	171,757	0.5	817	99,469

第69期（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

工事別	期首 繰越工事高 (百万円)	期中 受注工事高 (百万円)	計 (百万円)	期中 完成工事高 (百万円)	期末繰越工事高			期中施工高 (百万円)
					手持工事高 (百万円)	うち施工高 (百万円)		
土木	103,486	60,983	164,469	52,099	112,370	% 0.6	673	52,402
建築	68,271	53,086	121,357	54,353	67,004	1.4	908	54,814
計	171,757	114,070	285,827	106,452	179,375	0.9	1,582	107,217

- (注) 1. 前期以前に受注した工事で、契約の変更により請負金額の増減がある場合は、期中受注工事高にその増減額を含む。したがって、期中完成工事高にもかかる増減額が含まれる。
2. 期末繰越工事高の施工高は、支出金により手持工事高の施工高を推定したものである。
3. 期中施工高は(期中完成工事高+期末繰越施工高-前期末繰越施工高)に一致する。
4. 提出会社の不動産事業の売上高は、建築の「期中完成工事高」に含めて記載しており、それぞれ第68期は184百万円、第69期は222百万円が含まれている。
5. 期中受注工事高のうち海外工事の請負金額10億円以上の主なものは、次のとおりである。
- |      |                       |               |
|------|-----------------------|---------------|
| 第68期 | 日本・コートジボワール友好交差点改善工事  | (コートジボワール共和国) |
|      | カンボジア国道5号線北P2工区改善工事   | (カンボジア王国)     |
|      | 台北地下鉄信義線東延段CR580C工区工事 | (中華民国)        |
|      | ベナン共和国アラダ病院建設         | (ベナン共和国)      |
| 第69期 | アロチャ湖南西部地域灌漑施設改修計画    | (マダガスカル共和国)   |
|      | トアマシナ港拡張計画 パッケージ 1    | (マダガスカル共和国)   |

受注工事高の受注方法別比率

工事の受注方法は、特命と競争に大別される。

期別	区分	特命(%)	競争(%)	計(%)
第68期 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	土木工事	8.1	91.9	100.0
	建築工事	19.6	80.4	100.0
第69期 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	土木工事	7.4	92.6	100.0
	建築工事	20.6	79.4	100.0

(注) 百分比は請負金額比である。

完成工事高

期別	区分	国内		海外 (百万円) (A)	(A) / (B) (%)	計 (百万円) (B)
		官公庁 (百万円)	民間 (百万円)			
第68期 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	土木工事	48,150	2,033	2,053	3.9	52,237
	建築工事	8,593	37,652	811	1.7	47,058
	計	56,744	39,686	2,865	2.9	99,295
第69期 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	土木工事	46,529	2,512	3,056	5.9	52,099
	建築工事	6,049	47,444	858	1.6	54,353
	計	52,579	49,957	3,915	3.7	106,452

(注) 1. 海外工事の地域別割合は、次のとおりである。

地域	第68期 (%)	第69期 (%)
東南アジア	54.5	54.6
アフリカ	45.5	45.4
計	100.0	100.0

2. 完成工事のうち主なものは次のとおりである。

第68期 請負金額10億円以上の主なもの

宮城県仙台市	第3南蒲生幹線工事1
東京都下水道局	北区赤羽台一丁目、岩淵町付近枝線立坑設置工事
防衛省 沖縄防衛局	空自那覇(26)貯蔵庫新設土木その他工事
東急不動産㈱	(仮称)ブランズシティ久が原計画の本体工事
(一財)神戸すまいまちづくり 公社	新商業高校建設工事
足立成和信用金庫	足立成和信用金庫本店新築工事

第69期 請負金額10億円以上の主なもの

大阪広域水道企業団	松原ポンプ場築造工事
岩手県	金浜地区海岸災害復旧(23災585号)その2工事
国土交通省 中国地方整備局	鳥取西道路桂見高住トンネル工事
三菱地所レジデンス㈱	新宿区新宿6丁目計画新築工事
兵庫県尼崎市	わかば西小学校改築工事
東京急行電鉄㈱	(仮称)用賀三丁目計画建築基本設計および実施設計業務受委託

3. 完成工事高総額に対する割合が100分10以上の相手先別の完成工事高及びその割合は、次のとおりである。

第68期

該当する相手先はない。

第69期

該当する相手先はない。

4. 提出会社の不動産事業の売上高は、建築工事の「国内」の「民間」に含めて記載しており、それぞれ第68期は184百万円、第69期は222百万円が含まれている。

手持工事高（平成30年3月31日現在）

区分	国内		海外 (百万円) (A)	(A) / (B) (%)	計 (百万円) (B)
	官公庁(百万円)	民間(百万円)			
土木工事	91,878	4,892	15,600	13.9	112,370
建築工事	10,884	55,964	155	0.2	67,004
計	102,763	60,856	15,756	8.8	179,375

(注) 手持工事のうち請負金額10億円以上の主なものは、次のとおりである。

日本下水道事業団 東日本本部	石巻市石巻中央排水ポンプ場他 2	施設復興建設工事その	平成33年3月完成予定
東京都下水道局	千川増強幹線工事		平成33年2月完成予定
国土交通省 中国地方整備局	三隅・益田道路新沖田川橋下部工事		平成31年3月完成予定
住友不動産(株)	(仮称)三鷹中町計画新築工事		平成33年4月完成予定
防衛省 南関東防衛局	船越(29) 宿舎A棟新設建築工事		平成32年1月完成予定
太平電業株式会社	西風新都バイオマス発電所P Jの内の土木建築工事及び	実施設計	平成31年10月完成予定

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりである。なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものである。

重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められる会計基準に基づき作成されている。

重要な会計方針及び見積りについては、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」に記載している。

財政状態の分析

当連結会計年度の資産の部は、前連結会計年度末に比べ、受取手形・完成工事未収入金等が1,264百万円、立替金が2,508百万円減少したが、現金預金が12,639百万円、建設仮勘定が1,292百万円増加したことにより、資産合計は11,883百万円増加した141,115百万円となった。負債の部は、前連結会計年度末に比べ、支払手形・工事未払金が2,734百万円増加したこと等により、負債合計は3,956百万円増加した83,207百万円となった。純資産の部は、前連結会計年度末に比べ、7,926百万円増加した57,908百万円となり、自己資本比率は40.4%となった。

当連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析

当連結会計年度の連結売上高は、総額149,649百万円（前期比4.2%増）となり、原価の低減及び経費の節減を推進した結果、営業利益は11,227百万円（前期比11.7%増）、経常利益は11,248百万円（前期比11.0%増）、親会社株主に帰属する当期純利益は7,883百万円（前期比12.0%増）となった。

当連結会計年度のキャッシュ・フローについては、営業活動により15,010百万円増加し、投資活動により1,480百万円減少し、財務活動により874百万円減少し、この結果、現金及び現金同等物は12,639百万円の増加となり、当連結会計年度末残高は44,232百万円（前期比40.0%増）となった。

資本の財源及び資金の流動性についての分析

当社グループの財務戦略については、建設事業が主力事業であることから、請負金額の回収及び借入金を主体に資金を調達している。平成29年5月12日に開示した当社の「中期経営計画(2017～2019年度)」に基づき、資金調達手段の多様化により「財務体質の強化」を図る方針である。

#### 4【経営上の重要な契約等】

該当事項なし。

## 5【研究開発活動】

当社の研究開発については、社会情勢の変化に対応し独自技術の大深度化、改良等を積極的に実施し、受注の拡大を目指している。建設費の低減を図ると共に安全性の向上を図るため無人化、遠隔化の可能な工法や、工期短縮のためのプレキャスト化、C I M導入による施工効率化等に取り組んでいる。また、建築プロジェクトにおける設計・施工におよぶB I Mの導入検討や異業種との連携を図る共同研究にも取り組んでいる。

当連結会計年度における研究開発費の総額は58百万円であった。各セグメント別の研究開発費の区分は困難であるため、研究開発費は総額で記載している。また、主な研究開発成果は以下のとおりである。なお、子会社においては、研究開発活動は特段行っていない。

### (土木事業)

#### 1．New DREAM工法の開発

大豊式ニューマチックケーソン工法に多機能型ケーソン掘削機、掘削機メンテナンスシステム、大気圧エレベーター、DHENOXシステム(ヘリウム混合ガスシステム)、遠隔地耐力試験装置等を組み合わせ、主要高気圧作業の100%無人化施工を可能とするNew DREAM工法を開発した。本工法は国土交通省のテーマ設定技術に選定された他、2車線道路断面シールド工事の発進立坑に採用され、施工が完了した。今後、大断面道路・鉄道トンネルの立坑や雨水貯留施設等の大深度、大断面の地下構造物への適用が期待される。

#### 2．狭小断面ニューマチックケーソン工法の開発

自社開発の狭小断面用の遠隔操作掘削機やエレベーター等を配備することで、直径6m程度の2車線道路橋や鉄道橋の基礎、下水道入孔等の狭小断面の施工を可能とする、完全無人化狭小断面ニューマチックケーソン工法を開発した。本工法は東京都下水道局発注の大深度狭小断面のケーソン工事に採用され、安全かつ高精度で施工が完了し、その適合性が実証された。今後さらなる大深度狭小断面のニューマチックケーソン工事への適合可能な工法として、その用途拡大が期待される。

#### 3．減圧管理プログラムの開発

ニューマチックケーソン工法が大深度化する中、高気圧作業従事者が大気圧に帰還する際の安全な減圧方法に関する計算プログラムを専門医とタイアップして自社開発した。プログラムを使用することにより、ニューマチックケーソンにおける高気圧作業での多種多様な条件において、安全な減圧方法が確実かつ瞬時に算定されることで、さらなる大深度ニューマチックケーソンを施工する際も安全を確保できる。本プログラムによる減圧管理は平成27年度から開始され、現在まで28基のニューマチックケーソン工事で高気圧作業従事者の減圧症を予防し、安全や健康管理に貢献している。

#### 4．ニューマチックケーソン工法の高度施工管理技術の開発

ニューマチックケーソン工法のさらなる大断面・大深度化に備え、施工精度の向上および施工管理の効率化への対応として、リアルタイムの沈下姿勢計測システム、高圧作業室内の掘削形態計測システム、高気圧作業従事者ごとの作業情報自動認証システムを開発した。本システムは、高度計測技術に当社で開発したソフトを組み込みデータ処理するものであり、主要な管理を迅速かつ正確に自動で行うことが可能となる。現在まで4基のニューマチックケーソン工事に適用し、i-constructionの推進に伴う生産性向上や施工管理技術の高度化に貢献している。

#### 5．DAPPI(ダッピ)工法の開発

泥土加圧推進工法をベースに、管路内から地中障害物を安全・確実に撤去できるDAPPI工法を開発した。本工法は、カッター駆動部を管内から発進立坑へ引抜き、障害物等を撤去した後、駆動部を搬入、装着し再掘進する着脱・再掘進型管渠築造工法である。また障害物を坑内から撤去するため、地上の交通や地域住民への影響を最小限にできる。東京都発注の下水道再構築工事で初めて採用され、5件の施工実績があり、今後都市の再構築等、類似工事での採用が期待される。

#### 6．DRES(ドレス)工法の開発

港湾、河川、湖沼等の高含水の浚渫土を超高圧(4MPa)で効率的に脱水・分級してリサイクルできるシステムを開発した。本工法は、田子の浦港で浚渫土の減容化に採用され、また、新門司の築堤材製作工事では日本最大規模の処理システムで稼働するなど、その浚渫土処理累計は約95万 $m^3$ となり、港湾の維持や環境影響の低減に貢献している。特に田子の浦港では、高濃度ダイオキシン類の浚渫土中間処理にも採用され、環境負荷の低減やコスト縮減に貢献しており、今後さらに湖沼、港湾等での活躍が期待される。

## 7. 鋼製函体締切工法の開発

既設橋脚の水中部を鋼製函体で仮締切し、ドライな状態で高品質な橋脚耐震補強を安全に行うことのできる鋼製函体締切工法を民間4社で共同開発した。本工法に用いる函体は、浮力を利用して曳航沈設が可能のため、桁下空間の制限を受けず、フーチング上に設置できる。これまでに河川内の橋脚耐震補強に採用され、当社施工分として完了工事が5件ある。

本工法の特徴に加え、狭隘な場所や浅水深による作業制限がさらに緩和でき、大幅な工費の低減を可能とする当社独自開発の「複合壁体締切（R E C C）工法」では8基、と「カプセル壁体締切工法」では4基の施工実績があり、安全・安心社会の構築に貢献している。今後、同様な条件、工事で採用が期待される。

### （建築事業）

## 8. BIMの導入に向けた取り組み

現在、官民で建築の設計、積算、施工、維持管理にわたってBIM（Building Information Modeling）の導入が進められており、実際の工事に適用されはじめている。BIMの導入は建築生産システムの各プロセスにおける生産性を向上させることが目的であるが、当社においてもBIMを活用した施工管理を目標としており、設計施工のプロジェクトにおいて先行導入し、本格的な導入に向けての試行を進めている。

## 9. 免震・制震工法の開発

各種用途の建築物への免震工法の適用は定着しており、当社でも関東近郊、東海、関西、九州地区等、集合住宅を中心とした多くの実績がある。最近では、首都直下型・南海トラフ等の巨大地震の発生が懸念される中、防災拠点の耐震化や企業のBCP（企業継続計画）対策のひとつとして重要視されている。当社では新たにKTB協会に加入し、PC圧着関節工法の実施権を取得した。このPC圧着関節工法と免震工法を組み合わせることにより、大型物流倉庫等の大スパン建物で高い免震性と経済性を両立させることができる。また、制震工法については、超高層住宅での「摩擦ダンパー工法」や、官庁物件における「アンボンドブレース工法」の適用を通じて多くのノウハウを蓄積しており、関連技術を総合的に活用し、免震・制震分野へ継続的に取り組んでいく。

## 10. 高強度コンクリート関連技術の開発

コストの優位性から、高層建物へのRC造適用のニーズは定着しているが、これに応えるためには高強度コンクリートに関連した設計・施工技術の確立が不可欠である。当社では、品質・工期への有効性からPCa（プレキャスト）部材の活用も含む新技術に取り組んでおり、超高層物件や大型物件ではサイト（現場製作）PCa部材も活用した先進的な工法を採用し、その有効性を確認することができた。これらの成果は関東・関西など大都市圏を中心とした大型物件等に活用されており、埼玉県岩槻市の物流倉庫においてPCa化を含む合理化施工を行っている。

## 11. 耐震補強関連技術の開発

耐震基準を満たさない、いわゆる「既存不適格建築物」への対応は緊急の課題であり、「改正耐震促進法」への対応も求められている。しかし、実際の工事では「コスト・工期」のみならず「低騒音・低振動」であることや、「居ながら施工」への対応が不可欠となってきた。当社ではそれらの要望に対応できる要素技術として「MAR S（連続繊維補強）工法」、「鋼管（低騒音・低振動）コッター工法」、「デザインフィット工法（部分アンカー棒付き鉄骨ブレース補強）」、「スマイルパラレル工法」などを保有しており、それらを活用しながら物件の特性に配慮した多くの耐震補強工事を実現してきた。最近の事例としては、東北地区の庁舎改修工事でPCa部材とPC（高強度）鋼棒を使用した外側補強を行っており、前記技術と併せて官公庁物件を含む耐震改修分野への展開を図っていく。

## 12. 杭・基礎関連技術の開発

杭・基礎の関連工事はコストダウンにつながる数少ない工種である。当社では、引抜き抵抗に優れるなどの特徴を持つ中間および先端に拡径部を有する場所打ちコンクリート杭工法「Me-A工法」を共同開発し、一般財団法人ベターリビングより一般評定を取得した。本工法は、アースドリル工法を用いて、杭軸部の中間および先端に節状の拡径部（節）を設けて、建物を支える力を増大させた場所打ちコンクリート杭を造成する工法であり、この拡径部は地震の時に建物を転倒させようとする力に抵抗するため、杭の引抜き抵抗としても有効に働く。従来の杭より短く、もしくは杭軸部を細くすることが可能になり、杭の工事費を低減できる。これまでに、東京の集合住宅6件で採用されている。また、阪神・淡路大震災における杭頭破壊の事例を契機に、杭頭の損傷を制御する研究・開発が行われるようになり、多くの関連技術が実用化されるようになってきた。当社でも「CTP（杭頭半固定接合）工法」の導入を図り、杭性能の向上とともにコストダウンにも有効なツールとして検討を進めてきた結果、これまでに4件の高層集合住宅で採用している。両工法は汎用性に優れており、全国への積極的な展開を進めていく。

### （その他の事業）

研究開発活動は特段行っていない。

### 第3【設備の状況】

#### 1【設備投資等の概要】

(土木事業)

当連結会計年度においては、新中央機材センターの建設及び新規受注工事に伴う工事用機械を中心に設備投資を行い、その総額は1,644百万円であった。

(建築事業)

当連結会計年度においては、新中央機材センターの建設及び新規受注工事に伴う工事用機械を中心に設備投資を行い、その総額は532百万円であった。

(その他の事業)

当連結会計年度においては、重要な設備投資を行っていない。

#### 2【主要な設備の状況】

##### (1) 提出会社

事業所名 (所在地)	帳簿価額(百万円)					従業員数 (人)	
	建物・ 構築物	機械・運搬 具・工具器 具・備品	土地		リース 資産		合計
			面積(m <sup>2</sup> )	金額			
本 社 (東京都中央区)	1,561	773	(3,076) 284,248	2,711	7	5,054	93
北海道支店 (札幌市豊平区)	2	-	1,490	72	-	74	2
東北支店 (仙台市青葉区)	7	1	(2,678) 1,206	76	-	84	156
北陸支店 (新潟市中央区)	60	0	48,189	451	-	512	2
東京支店 (東京都中央区)	164	1	(1,884) 24,101	399	-	565	382
名古屋支店 (名古屋市中村区)	84	11	(66) 6,269	160	-	256	82
大阪支店 (大阪市中央区)	162	3	13,374	907	-	1,074	167
広島支店 (広島市中区)	16	2	(212) 6,973	246	-	265	10
九州支店 (福岡市博多区)	81	0	(660) 1,186	202	-	284	42
海 外 (マダガスカル共和国他)	-	31	-	-	-	31	27
計	2,141	825	(8,577) 387,038	5,229	7	8,203	963

(2) 主な国内子会社

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの名称	帳簿価額(百万円)					従業員数 (人)
			建物・ 構築物	機械・運搬 具・工具器 具・備品	土地		合計	
					面積(m <sup>2</sup> )	金額		
(株) 森本組	本社他 (大阪府中央区)	土木事業 建築事業	11	64	-	-	76	412
大豊塗装工業(株)	本社他 (東京都台東区)	その他の事業	10	0	56	4	14	19
大豊不動産(株)	本社他 (東京都中央区)	その他の事業	12	0	49	9	22	1
進和機工(株)	本社他 (茨城県 つくばみらい市)	その他の事業	-	39	-	-	39	16

(3) 在外子会社

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの名称	帳簿価額(百万円)						従業員数 (人)
			建物・ 構築物	機械・運搬 具・工具器 具・備品	土地		リース資産	合計	
					面積(m <sup>2</sup> )	金額			
タイ大豊(株)	本社 (タイ王国)	建築事業	85	2	15,034	108	2	199	28

- (注) 1. 提出会社は土木事業及び建築事業を営んでいるが、大半の設備は共通的に使用されているので、報告セグメントごとに分類せず、主要な事業所ごとに一括して記載している。  
2. 投下資本の金額は、有形固定資産の帳簿価額で建設仮勘定は含まない。  
3. 提出会社の土地欄中( )内は、賃借中のものであり、外書きで示している。  
4. 提出会社の土地建物のうち連結子会社以外に賃貸中の主なもの

事業所名	土地(m <sup>2</sup> )	建物(m <sup>2</sup> )
本 社	515	10,278

5. リース契約による賃借設備のうち主なもの

会社名	事業所名	セグメントの 名称	設備の内容	台数	リース期間	年間リース料 (百万円)
大豊建設(株)	本社他	土木事業 建築事業	宿泊設備他	一式他	4年間他	13

3【設備の新設、除却等の計画】

会社名 事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	投資予定金額 (百万円)		資金調達方法	備考
			総額	既支払額		
大豊建設(株) 中央機材センター (茨城県稲敷郡阿見町)	土木事業	ニューマチック ケーソン設備	500	-	自己資金	平成30年4月着手 平成31年3月完成予定
			1,000	-	自己資金	平成31年4月着手 平成32年3月完成予定
大豊建設(株) (茨城県稲敷郡阿見町)	土木事業 建築事業	新中央機材セン ター	2,559	2,445	自己資金	平成28年10月着手 平成30年4月完成
大豊建設(株) (東京都中央区)	土木事業 建築事業	本社ビル改修	1,000	-	自己資金	平成30年4月着手 平成31年3月完成予定

## 第4【提出会社の状況】

### 1【株式等の状況】

#### (1)【株式の総数等】

##### 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	160,000,000
計	160,000,000

(注)平成30年6月28日開催の第69回定時株主総会において、株式併合の効力発生日(平成30年10月1日)をもって、当社の発行可能株式総数を32,000,000株とする旨の決議をしている。

##### 【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数(株) (平成30年3月31日)	提出日現在発行数(株) (平成30年6月28日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	87,210,143	87,210,143	東京証券取引所 市場第一部	単元株式数は 1,000株である
計	87,210,143	87,210,143		

(注)平成30年6月28日開催の第69回定時株主総会において、株式併合の効力発生日(平成30年10月1日)をもって、当社の単元株式数を1,000株から100株に変更する旨の決議をしている。

#### (2)【新株予約権等の状況】

##### 【ストックオプション制度の内容】

##### a.2014年度株式報酬型新株予約権

決議年月日	平成27年2月13日
付与対象者の区分及び人数(名)	取締役 7 執行役員 8
新株予約権の数(個)	227
新株予約権の目的となる株式の種類、内容及び数(株)	普通株式 227,000
新株予約権の行使時の払込金額(円)	1
新株予約権の行使期間	自平成27年3月3日 至 平成47年3月2日
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円)	発行価格 696 資本組入額 (注)1
新株予約権の行使の条件	(注)2
新株予約権の譲渡に関する事項	取締役会の承諾なく譲渡、譲渡担保又は質入れその他担保設定することはできない。
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	-

b.2015年度株式報酬型新株予約権

決議年月日	平成28年2月15日
付与対象者の区分及び人数(名)	取締役 7 執行役員 11
新株予約権の数(個)	468
新株予約権の目的となる株式の種類、内容及び数(株)	普通株式 468,000
新株予約権の行使時の払込金額(円)	1
新株予約権の行使期間	自 平成28年3月2日 至 平成48年3月1日
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円)	発行価格 407 資本組入額 (注)1
新株予約権の行使の条件	(注)2
新株予約権の譲渡に関する事項	取締役会の承諾なく譲渡、譲渡担保又は質入れその他担保設定することはできない。
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	-

c.2016年度株式報酬型新株予約権

決議年月日	平成29年 2月10日
付与対象者の区分及び人数(名)	取締役 7 執行役員 11
新株予約権の数(個)	405
新株予約権の目的となる株式の種類、内容及び数(株)	普通株式 405,000
新株予約権の行使時の払込金額(円)	1
新株予約権の行使期間	自 平成29年3月2日 至 平成49年3月1日
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円)	発行価格 487 資本組入額 (注)1
新株予約権の行使の条件	(注)2
新株予約権の譲渡に関する事項	取締役会の承諾なく譲渡、譲渡担保又は質入れその他担保設定することはできない。
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	-

当事業年度の末日(平成30年3月31日)における内容を記載している。提出日の前月末現在(平成30年5月31日)において、記載すべき内容が当事業年度の末日における内容から変更がないため、提出日の前月末現在に係る記載を省略している。

- (注)1. 募集新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金の額は、会社計算規則第17条第1項に従い算出される資本金等増加限度額の2分の1の金額とし、計算の結果生じる1円未満の端数は、これを切り上げるものとする。
2. (1) 新株予約権者は、当社の取締役及び執行役員のいずれの地位も喪失した日から1年経過した日の翌日(以下、「権利行使開始日」という。)から9年間に限り、募集新株予約権を行使することができる。
- (2) 次のいずれかに該当する事由が生じた場合、新株予約権者は、当該新株予約権を行使できない。  
新株予約権者が、当社の取締役又は執行役員のいずれかに在職している期間中に禁固以上の刑に処せられた場合。  
新株予約権者又はその法定相続人が、当社所定の書面により新株予約権の全部又は一部を放棄する旨を申し出た場合。
- (3) 上記(1)にかかわらず、新株予約権者が死亡した場合、新株予約権者の相続人は、当該新株予約権者が死亡した日から6か月間に限り、当該新株予約権を行使することができる(ただし、相続人がかかる期間に死亡した場合の再相続は除く。)

【ライツプランの内容】

該当事項なし。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項なし。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】  
該当事項なし。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総数増減数 (千株)	発行済株式総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金増減額 (百万円)	資本準備金残高 (百万円)
平成25年12月24日 (注)1	7,000	74,670	1,005	6,106	1,005	4,616
平成26年1月22日 (注)2	1,500	75,670	215	6,321	215	4,831
平成27年7月29日 (注)3	10,000	85,670	2,355	8,676	2,355	7,186
平成27年8月26日 (注)4	1,500	87,170	353	9,030	353	7,540
平成29年9月30日 (注)5	40	87,210	9	9,039	9	7,549

(注)1. 公募による新株式発行(一般募集)

発行価格 303円  
発行価額 287.30円  
資本組入額 143.65円  
払込金総額 2,011百万円

2. 第三者割当増資による新株式発行(オーバーアロットメントによる売出し)

発行価格 303円  
発行価額 287.30円  
資本組入額 143.65円  
割当先 大和証券株

3. 公募による新株式発行(一般募集)

発行価格 494円  
発行価額 471.05円  
資本組入額 235.525円  
払込金総額 4,710百万円

4. 第三者割当増資による新株式発行(オーバーアロットメントによる売出し)

発行価格 494円  
発行価額 471.05円  
資本組入額 235.525円  
払込金総額 706百万円  
割当先 大和証券株

5. 新株予約権の行使による増加

(5) 【所有者別状況】

平成30年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数 1,000株)								単元未満株式の状況 (株)
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	-	35	34	61	166	4	4,671	4,971	
所有株式数 (単元)	-	31,013	2,296	6,844	27,135	8	19,302	86,598	612,143
所有株式数の割合(%)	-	35.81	2.65	7.90	31.34	0.01	22.29	100.00	

(注)1. 自己株式770,018株は、「個人その他」に770単元、「単元未満株式の状況」に18株含めて記載している。

2. 「単元未満株式の状況」の欄には、証券保管振替機構名義の株式が100株含まれている。

( 6 ) 【大株主の状況】

平成30年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式(自己 株式を除く。)の 総数に対する所有 株式数の割合 (%)
日本トラスティ・サービス信託銀行(株) (信託口)	東京都中央区晴海1丁目8-11	7,998	9.25
日本マスタートラスト信託銀行(株) (信託口)	東京都港区浜松町2丁目11-3	5,385	6.23
住友不動産(株)	東京都新宿区西新宿2丁目4-1	3,248	3.76
あいおいニッセイ同和損害保険(株)	東京都渋谷区恵比寿1丁目28-1	3,105	3.59
日本トラスティ・サービス信託銀行(株) (信託口9)	東京都中央区晴海1丁目8-11	2,431	2.81
BNP PARIBAS SECURITIES SERVICES LUXEMBOURG/JASDEC/FIM/LUXEMBOURG FUNDS/UCITS ASEETS (香港上海銀行東京支店 カストディ 営業部)	33, RUE DE GASPERICH, L- 5826 HOWALD- HESPERANGE, LUXEMBOURG (東京都中央区日本橋3丁目11- 1)	2,100	2.43
第一生命保険(株)	東京都千代田区有楽町1丁目13-1	2,055	2.38
CHASE MANHATTAN BANK GTS CLIENTS ACCOUNT ESCROW (株みずほ銀行決済営業部)	5TH FLOOR, TRINITY TOWER 9, THOMAS MORE STREET LONDON, E1W 1YT, UNITED KINGDOM (東京都港区港南2丁目15-1)	1,633	1.89
日本トラスティ・サービス信託銀行(株) (信託口5)	東京都中央区晴海1丁目8-11	1,548	1.79
STATE STREET BANK AND TRUST COMPANY (香港上海銀行東京支店 カストディ 業務部)	ONE LINCORN STREET, BOSTON MA USA 02111 (東京都中央区日本橋3丁目11- 1)	1,418	1.64
計		30,922	35.77

(注) 1 . 平成30年3月31日現在における、日本トラスティ・サービス信託銀行(株)(信託口)、日本マスタートラスト信託銀行(株)(信託口)、日本トラスティ・サービス信託銀行(株)(信託口9)、日本トラスティ・サービス信託銀行(株)(信託口5)の信託業務に係る株式数については、当社として把握することができないため記載していない。

2. ブラックロック・ジャパン株式会社から、平成28年8月4日付で、ブラックロック(ルクセンブルグ)エス・エー(BlackRock (Luxembourg) S.A.)、ブラックロック・インターナショナル・リミテッド(BlackRock International Limited)およびブラックロック・インスティテューショナル・トラスト・カンパニー、エヌ・エイ。(BlackRock Institutional Trust Company, N.A.)を共同保有者とする大量保有報告書が提出されているが、当社として平成30年3月31日現在における当該法人の実質所有株式数を完全に把握できないため、上記大株主の状況には含めていない。  
なお、その大量保有報告書の内容は次のとおりである。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数 (千株)	株券等保有割合 (%)
ブラックロック・ジャパン株式会社	東京都千代田区丸の内一丁目8番3号	1,846	2.12
ブラックロック(ルクセンブルグ)エス・エー(BlackRock (Luxembourg) S.A.)	ルクセンブルク大公国 L-1855 J.F.ケネディ通り 35A	1,859	2.13
ブラックロック・インターナショナル・リミテッド(BlackRock International Limited)	英国 エディンバラ センブル・ストリート1 エクスチェンジ・プレース・ワン (郵便番号 EH3 8BL)	369	0.42
ブラックロック・インスティテューショナル・トラスト・カンパニー、エヌ・エイ。(BlackRock Institutional Trust Company, N.A.)	米国 カリフォルニア州 サンフランシスコ市 ハワード・ストリート400	356	0.41
計	-	4,430	5.08

3. 三井住友信託銀行株式会社から、平成30年2月6日付で、三井住友トラスト・アセットマネジメント株式会社及び日興アセットマネジメント株式会社を共同保有者とする大量保有報告書(変更報告書)が提出されているが、当社として平成30年3月31日現在における当該法人の実質所有株式数を完全に把握できないため、上記大株主の状況には含めていない。  
なお、その大量保有報告書の内容は次のとおりである。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数 (千株)	株券等保有割合 (%)
三井住友信託銀行株式会社	東京都千代田区丸の内一丁目4番1号	3,456	3.96
三井住友トラスト・アセットマネジメント株式会社	東京都港区芝三丁目33番1号	249	0.29
日興アセットマネジメント株式会社	東京都港区赤坂九丁目7番1号	1,889	2.17
計	-	5,594	6.41

4. みずほ証券株式会社から、平成29年7月7日付で、アセットマネジメントOne株式会社を共同保有者とする大量保有報告書(変更報告書)が提出されているが、当社として平成30年3月31日現在における当該法人の実質所有株式数を完全に把握できないため、上記大株主の状況には含めていない。  
なお、その大量保有報告書の内容は次のとおりである。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数 (千株)	株券等保有割合 (%)
みずほ証券株式会社	東京都千代田区大手町1丁目5番1号	72	0.08
アセットマネジメントOne株式会社	東京都千代田区丸の内一丁目8番2号	3,470	3.98
計	-	3,542	4.06

(7) 【議決権の状況】  
【発行済株式】

平成30年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式			
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 770,000		
完全議決権株式(その他)	普通株式 85,828,000	85,828	
単元未満株式	普通株式 612,143		
発行済株式総数	87,210,143		
総株主の議決権		85,828	

(注) 単元未満株式の欄には証券保管振替機構名義の株式が100株含まれている。

【自己株式等】

平成30年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義所有株 式数(株)	他人名義所有株 式数(株)	所有株式数 の合計(株)	発行済株式総数に 対する所有株式数 の割合(%)
大豊建設株式会社	東京都中央区新川 一丁目24番4号	770,000	-	770,000	0.88
計		770,000	-	770,000	0.88

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項なし。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項なし。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	16,055	8,900,048
当期間における取得自己株式	2,163	1,350,997

(注) 当期間における取得自己株式には、平成30年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取による株式数は含めていない。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額 (円)	株式数(株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	-	-	-	-
消却の処分を行った取得自己株式	-	-	-	-
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	-	-	-	-
その他 (単元未満株式の買増請求による売渡し)	845	474,045	-	-
その他 (新株予約権の行使による譲渡)	92,000	45,339,000	-	-
保有自己株式数	770,018	-	772,181	-

(注) 当期間における保有自己株式数には、平成30年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取による株式数は含めていない。

### 3【配当政策】

利益配分については、長期的発展の礎となる財務体質の充実を図りつつ、株主各位への安定的な配当の維持及び向上を図っていくことを基本方針としている。また、期末配当において年1回の剰余金の配当を行うことを基本方針としており、この剰余金の配当の決定機関は株主総会である。

当事業年度（第69期）の配当については、当期の業績並びに経営環境を総合的に勘案して、1株当たり15円の配当とする。次期の配当については1株当たり15円を予定している。

また、内部留保については、今後予想される建設業界の競争激化に対処するため、新技術の開発等の投資に活用し、企業体質と企業競争力のさらなる強化に取り組む所存である。

当事業年度の剰余金の配当は次のとおりである。

決議年月日	配当金の総額（百万円）	1株当たりの配当額（円）
平成30年6月28日定時株主総会決議	1,296	15

### 4【株価の推移】

#### （1）【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第65期	第66期	第67期	第68期	第69期
決算年月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
最高（円）	493	738	659	597	652
最低（円）	97	343	406	395	493

（注）最高・最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものである。

#### （2）【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成29年10月	11月	12月	平成30年1月	2月	3月
最高（円）	550	585	597	575	652	639
最低（円）	521	530	552	535	522	585

（注）最高・最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものである。

5【役員 の 状 況】

男性 10名 女性 -名 (役員のうち女性の比率-%)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
代表取締役	執行役員社長	大隅 健一	昭和26年10月24日生	昭和49年4月 当社入社 平成18年4月 東京支店副支店長 平成19年4月 東北支店副支店長 平成20年2月 東北支店長 平成20年6月 執行役員東北支店長 平成22年6月 取締役兼常務執行役員就任 平成24年4月 取締役兼専務執行役員就任 平成28年4月 取締役兼執行役員副社長就任東北支店長を委嘱 平成29年4月 代表取締役兼執行役員副社長就任 平成29年6月 代表取締役兼執行役員社長就任(現任)	(注) 3	19
代表取締役	執行役員副社長	多田 二三男	昭和28年11月23日生	昭和52年4月 当社入社 平成16年7月 土木本部土木第一営業部長 平成17年6月 取締役就任 平成18年4月 取締役兼執行役員就任 土木本部次長を委嘱 平成19年1月 東京支店長を委嘱 平成19年6月 取締役兼常務執行役員就任 土木本部副本部長を委嘱 平成20年6月 土木本部長を委嘱 平成21年6月 代表取締役兼専務執行役員就任 平成23年4月 代表取締役兼執行役員副社長就任(現任) 平成24年4月 建築本部長を委嘱	(注) 4	39
取締役	専務執行役員 管理本部長	中杉 正伸	昭和28年10月3日生	昭和52年4月 当社入社 平成11年8月 管理本部総務部法務課長 平成16年3月 管理本部総務部総務課長 平成20年1月 管理本部総務部長 平成21年2月 執行役員管理本部長 平成21年6月 取締役兼執行役員就任 管理本部長を委嘱(現任) 平成22年6月 取締役兼常務執行役員就任 平成25年4月 取締役兼専務執行役員就任(現任)	(注) 4	16
取締役	専務執行役員 建築本部長	村田 茂樹	昭和27年8月18日生	昭和46年4月 当社入社 平成14年4月 大阪支店建築部長 平成20年6月 執行役員大阪支店副支店長兼建築部長 平成22年4月 執行役員建築本部副本部長兼東京支店副支店長 平成23年4月 常務執行役員建築本部副本部長 平成23年6月 取締役兼常務執行役員就任 建築本部副本部長を委嘱 平成23年11月 東京支店副支店長を委嘱 平成25年4月 建築本部副本部長を委嘱 平成26年4月 建築本部長を委嘱(現任) 平成26年6月 取締役兼専務執行役員就任(現任)	(注) 4	11
取締役	常務執行役員 土木本部長	今井 和美	昭和30年9月16日生	昭和53年4月 当社入社 平成19年11月 土木本部土木部長代理 平成20年5月 九州支店工事部長 平成21年2月 東京支店土木技術部長 平成24年6月 土木本部土木部長 平成25年4月 執行役員土木本部土木部長 兼土木部長兼土木技術部長 平成26年4月 執行役員土木本部土木副本部長 兼土木部長 平成29年6月 取締役常務執行役員就任 土木本部長を委嘱(現任)	(注) 4	8

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役		川口 哲郎	昭和23年10月31日生	平成17年12月 外務省中東アフリカ地域調整官 平成18年3月 大臣官房総務課企画官人事課 平成20年1月 特命全権大使マダガスカル、コモロ 平成24年12月 退官 平成29年6月 取締役就任(現任)	(注)4	-
取締役		垣鏑 公良	昭和29年10月25日生	昭和57年4月 検事任官東京地方検察庁 昭和61年4月 弁護士登録第一東京弁護士会 垣鏑法律事務所入所 平成17年4月 東京ウィル法律事務所開設 平成29年6月 取締役就任(現任)	(注)4	-
監査役 (常勤)		木屋 善之	昭和29年8月27日生	昭和52年4月 当社入社 平成15年4月 管理本部経理部主計課長 平成18年7月 ㈱森本組経理部長 平成20年4月 ㈱森本組執行役員管理本部副本部長兼経理部長 平成21年6月 ㈱森本組取締役執行役員管理本部副本部長兼経理部長 平成23年6月 ㈱森本組監査役 平成25年6月 監査役就任(現任)	(注)5	2
監査役 (非常勤)		橋本 一男	昭和28年5月8日生	平成22年4月 あいおい損害保険㈱(現あいおいニッセイ同和損害保険㈱)執行役員四国本部長 平成22年10月 あいおい損害保険㈱(現あいおいニッセイ同和損害保険㈱)執行役員北海道本部長 平成23年4月 あいおい生命保険㈱常務執行役員 平成23年10月 三井住友海上あいおい生命保険㈱執行役員 平成26年3月 同社退任 平成29年6月 監査役就任(現任)	(注)5	-
監査役 (非常勤)		原田 良輔	昭和29年5月22日生	平成22年4月 ㈱三井住友銀行常務執行役員 平成23年5月 三井住友ファイナンス&リース㈱専務執行役員 平成23年6月 同社取締役専務執行役員 平成25年5月 SMBC債権回収㈱顧問 平成25年6月 同社代表取締役社長 平成29年6月 同社退任 平成29年6月 監査役就任(現任)	(注)5	-
計						98

- (注) 1. 取締役川口哲郎及び垣鏑公良は、「社外取締役」である。  
2. 監査役橋本一男及び原田良輔は、「社外監査役」である。  
3. 平成30年6月28日開催の定時株主総会の終結の時から2年間  
4. 平成29年6月29日開催の定時株主総会の終結の時から2年間  
5. 平成29年6月29日開催の定時株主総会の終結の時から4年間  
6. 当社は、法令に定める監査役の数に欠けることになる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠監査役1名を選任している。補欠監査役の略歴は次のとおりである。

氏名	生年月日	略歴	所有株式数 (千株)
土屋 文男	昭和27年7月26日生	昭和60年4月 弁護士登録 第二東京弁護士会 平成元年4月 土屋綜合法律事務所開設 現在に至る	1

7. 当社は執行役員制度を導入しており、平成30年6月28日現在の執行役員は次のとおりである。  
印は取締役兼務者である。

役職	氏名	担当業務
執行役員社長	大 隅 健 一	
執行役員副社長	多 田 二三男	安全環境担当兼海外事項担当
専務執行役員	中 杉 正 伸	管理本部長兼コンプライアンス・関係会社・総務事項担当
専務執行役員	村 田 茂 樹	建築本部長
専務執行役員	中 尾 淳 一	西日本建築担当
常務執行役員	今 井 和 美	土木本部長
常務執行役員	田 村 利 和	海外支店長兼営業部長兼マレーシア営業所長兼海外現地法人担当
常務執行役員	森 下 覚 恵	名古屋支店長
常務執行役員	松 井 秀 一	大阪支店長
常務執行役員	永 田 修 一	建築本部副本部長兼建築部長兼建築第二営業部長
常務執行役員	竹 内 清	東京土木支店長
執行役員	田 丸 裕	土木本部副本部長兼土木営業部長
執行役員	尾 形 則 光	東北支店長
執行役員	上 島 明 彦	監査室長
執行役員	中 村 百 樹	東京建築支店長
執行役員	池 田 聡	管理本部人事部長
執行役員	浅 田 潤 一	東北支店副支店長
執行役員	高 畑 真 二	建築本部建築第一営業部長
執行役員	木 内 孝	東京建築支店副支店長
執行役員	釘 本 実	管理本部経理部長

## 6【コーポレート・ガバナンスの状況等】

### (1)【コーポレート・ガバナンスの状況】

#### 企業統治の体制

##### 1)企業統治の体制の概要

当社は、「取締役会」、「監査役会」、「経営会議」及び「執行役員会」の機関を置き、経営機構を意思決定・監督と業務執行に分離し、また監査役と連携して業務監査及び内部統制の有効性評価を行う「監査室」を設置し、コーポレートガバナンスの強化及び財務報告の信頼性の確保を図っている。

##### 「取締役会」

取締役会は取締役（5名）及び社外取締役（2名）で構成され、定例取締役会を毎月、臨時取締役会を必要に応じて開催し、取締役会規程に基づき重要事項の決定を行うとともに業務執行状況の監督を行い、経営監視機能の強化を図っている。

##### 「監査役会」

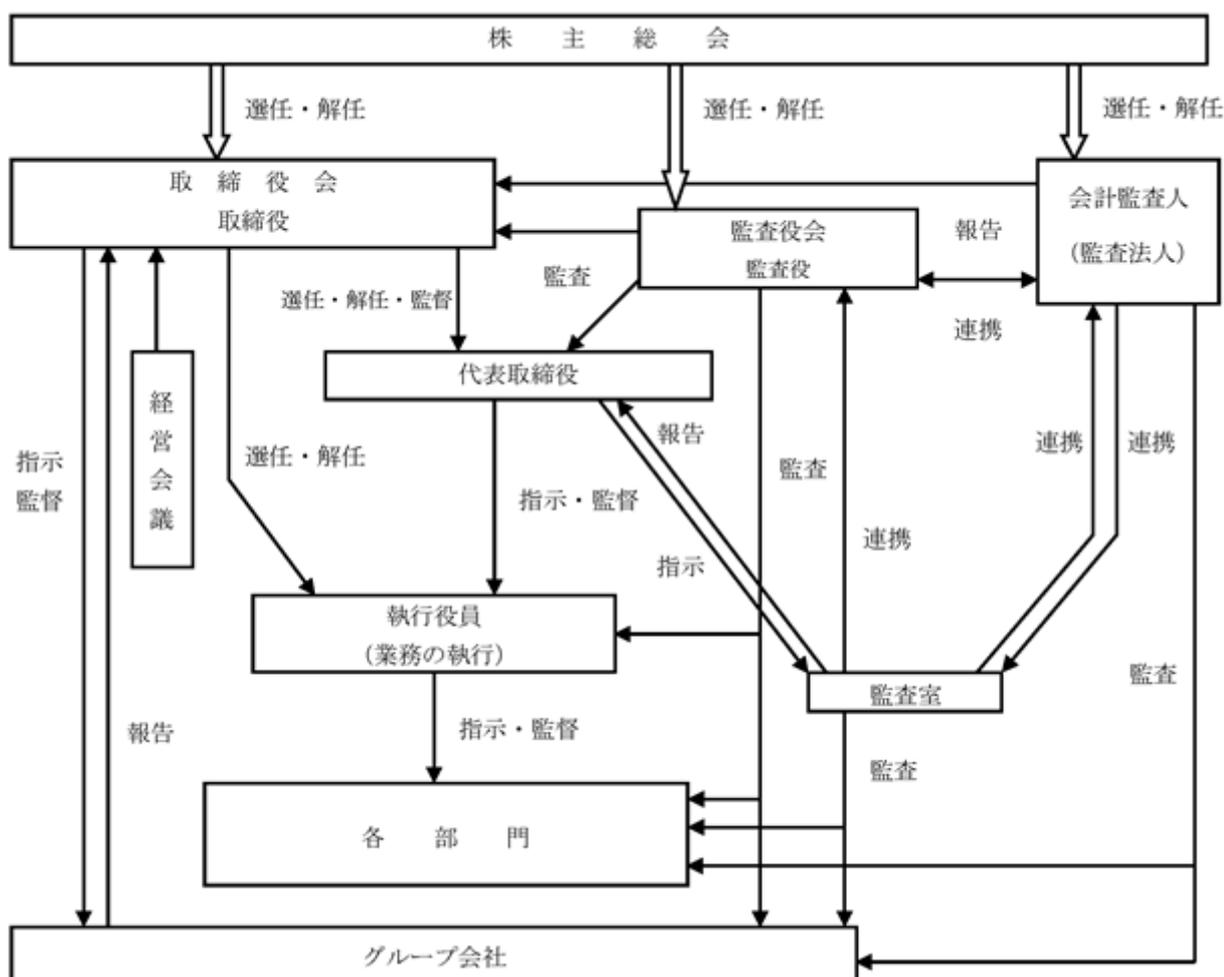
当社は、監査役制度を採用しており、監査役会は常勤監査役（1名）及び社外監査役（2名）で構成され、定例監査役会を毎月、臨時監査役会を必要に応じて開催し、監査計画の策定、実施状況及び監査結果等を検討、評価している。また、定例取締役会、臨時取締役会、経営会議及び執行役員会等の重要な会議に出席し意見を述べるほか、取締役会の意見聴取や資料の閲覧等を行い、取締役会の業務執行の妥当性を監査している。

##### 「経営会議」

経営会議は取締役と各本部の本部長等（10名）で構成され、経営上重要な事項について取締役会決議の事前審議を行うとともに、業務執行上の意思決定を行っている。

##### 「執行役員会」

執行役員会は執行役員（20名）で構成され、定例執行役員会を年4回開催し、取締役会で決定された方針の伝達・指示を行うとともに業務の執行状況について報告を行っている。



## 2)企業統治の体制を採用する理由

当社は、企業として社会的使命と責任を果たすとともに、継続的に成長と発展を目指すため、企業競争力強化の観点から迅速で適切な経営判断を行うことが重要であり、経営の透明性を図るためのチェック機能の充実及び公平性を維持することが重要な課題であると考えており、その課題を対処する最良の組織体制が現在の体制であると考えている。

## 3)内部統制システムの整備状況

当社の内部統制システムの基本方針は以下のとおりである。

- a. 当社の取締役、執行役員および使用人の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制
  1. 当社は、当社の取締役、執行役員および使用人（以下「役職員」という）が法令、定款その他社内規程および社会通念を遵守した行動を取るため、「大豊建設株式会社企業行動規範」を定め、全役職員に周知徹底させる。
  2. 当社は、財務報告の信頼性を確保するため、金融商品取引法その他の関係法令に基づき、内部統制システムを整備し、運用するとともに、法令等に定められた開示を適時適切に行う。
  3. 当社は、社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力との一切の関係を遮断するとともに、これら反社会的勢力に対しては、外部専門機関と連携し、全社を挙げて毅然とした態度で対応する。
- b. 取締役の職務の執行に係る文書その他の情報の保存および管理に関する体制
  1. 当社は、取締役および執行役員（以下「取締役等」という）の職務の執行に係る文書その他の情報を法令および文書・記録管理規程に基づき、適切に作成し、保存および管理を行う。
  2. 当社は、取締役会議事録および事業運営上の重要事項に関する決裁書類など取締役の職務の執行に関する重要な文書については、取締役等および監査役が必要に応じていつでも閲覧することができるよう保存し、管理する。
- c. 損失の危険の管理に関する規程その他の体制  
当社は、監査室に定期的に日常の業務執行について内部監査を実施させるものとし、調査結果を社長に報告する。なお、業務執行に関して、法令または社内規程等に反するおそれのあるリスクが発見されたときは、監査室長は、直ちに社長および関係部門管理者にその旨報告し、関係部門管理者は、その報告に基づき必要な改善措置をとる。
- d. 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
  1. 当社は、取締役会で年度経営計画および中期経営計画を定め、取締役等はその目標達成のために効率的に職務執行を行い、定期的にその進捗状況を取締役会において報告する。
  2. 当社は、業務執行の決定にあたり、法令および取締役会規程、経営会議規程、執行役員会規程等の社内規程に従い、審議の効率化および実効性の向上を図る。
  3. 当社は、日常の業務執行については、職務執行規程、職制等に従い、業務遂行に必要な職務の範囲および責任を明確にし、役職員に周知徹底させる。
- e. 当社および子会社から構成される企業グループにおける業務の適正を確保するための体制
  1. 当社の子会社の取締役等の職務執行にかかる事項の報告に関するための体制  
当社は、当社および子会社の取締役が出席するグループ役員連絡会等を定期的開催し、子会社の営業成績、財務状況その他の重要な情報を把握するとともに、グループ全体の情報共有化を図る。
  2. 子会社の損失の危険の管理に関する体制  
当社は、子会社の事業活動に伴い生じる各種リスクの対応策については、当社が指示する部署において、その対応策を検討し、子会社の取締役等に対する指導を行うほか、災害等の当社および子会社に共通する事項については、対応マニュアルを整備する。
  3. 子会社の取締役等の職務執行が法令および定款に適合することを確保するための体制
    - イ. 当社は、グループ各社にそれぞれの規模や業態に応じて、適正数の監査役またはコンプライアンス推進担当者を置くよう指導するとともに、子会社の取締役等および使用人に対し、コンプライアンスの知識を高めるための研修を実施し、コンプライアンス体制の強化を図る。
    - ロ. 当社は、グループ役員連絡会等において、グループ全体のコンプライアンスに係る重要事項等につき協議し、情報共有したうえで指導を行うとともに、内部統制システムの基本方針に基づき、内部統制システムの継続的な向上を図る。また、当社は、適宜に当社の顧問弁護士により、当社および子会社の取締役等ならびに使用人に対し研修を行う。
  - ハ. 当社は、当社の企業グループ全体に適用される内部通報制度として公益通報者保護規程を定め、外部の弁護士に対して直接通報を行うことができるコンプライアンス・ホットラインを設置する。
- f. 監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項

- 1.取締役会は、監査役会監査の実効性を高め、かつ監査業務を円滑に遂行するため、監査役の要請に基づき、監査役会と十分に協議し、監査役会との合意に基づき、監査役の職務を補助すべき使用人を配置する。
- 2.監査役を補助すべき使用人を配置する際、当該使用人は専属とし、監査役の指揮命令のみに服する。また、当該使用人の人事異動、人事評価、懲戒処分等の決定は、あらかじめ監査役会が委任した常勤監査役の同意を必要とする。

g. 監査役への報告に関する体制

- 1.当社の取締役等は、取締役会、執行役員会等の会議において、監査役に対し、審議事項・決議事項につき、適切な報告を行うために、法令を遵守し、有効な内部統制の運用および財務内容の適正開示に努める。
- 2.取締役等は、会社に著しい損害を及ぼすおそれのある事実を発見したときは、直ちに監査役に報告する。
- 3.監査役が取締役等の職務の執行に関して意見を表明し、またはその改善を勧告したときは、当該取締役等は、改善を求められた事項の対応等およびその進捗状況を監査役に報告する。
- 4.当社の子会社の取締役等、監査役および使用人は、職務執行に関して重大な法令・定款違反、若しくは不正行為の事実、又は会社に重大な損失を与える事実、またはその恐れがあることを知ったときは、遅滞なく当社監査役、または当社管理本部長に報告を行い、管理本部長は当社の監査役に報告するものとする。
- 5.当社は、当社の監査役へ前項の報告を行った当社および子会社の役職員に対し、当該報告したことを理由として不利な取扱いを行うことを禁止し、その旨を当社および子会社の役職員に周知徹底する。

h. その他監査役が監査が実効的に行われることを確保するための体制

- 1.監査役は、取締役会に出席するほか、必要と認められる重要な会議に出席する。
- 2.当社は、監査役がその職務の執行について、会社法第388条に基づく費用の前払等の請求をしたときは、担当部署において審議の上、速やかに当該費用または債務を処理する。
- 3.当社および子会社の取締役等は、監査体制の実効性を高めるため、監査役の意見を十分に尊重し、監査役の監査に協力する。
- 4.監査役は、月1回定期的に監査役会を開催するほか、必要に応じて臨時に開催し、監査実施状況等について情報交換および協議を行うとともに、会計監査人から定期的に会計監査に関する報告を受け、意見交換を行う。

4) リスク管理体制の整備の状況

当社のリスク管理は、社内各部署において担当業務に関するリスクを想定し、その対応策を作成し教育している。災害等各部署に共通するリスクについては、対応マニュアルを整備し継続的に教育している。また、日常の業務については、監査室を中心とした監査チームが定期的な内部監査を実施し、業務執行に関し法令・社内規程等に反する恐れのあるリスクが発見された時は、直ちに管理本部長に報告し、必要な改善を行っている。また顧問弁護士とは顧問契約に基づき、法律上の判断を必要とする場合に適時指導・助言等を受けている。

内部監査及び監査役監査の状況

監査室を中心とした監査チームが、本社各部門及び各支店の内部監査を実施しており、監査役監査との連携を図り、会社の業務及び財産の状況を調査し、事業年度ごとに作成される監査計画に基づく監査を実施している。なお、会計監査及び財務報告に係る内部統制監査の報告について、会計監査人と意見交換し、連携を図っている。

監査役監査の状況については、1)企業統治の体制の概要に記載の通りである。

会計監査の状況

会計監査は有限責任 あずさ監査法人と監査契約を締結している。会計監査業務を執行した公認会計士は、金子能周、春山直輝（いずれも継続監査年数は7年以内）であり、会計監査業務に係る補助者の構成は、公認会計士5名、その他5名である。

## 社外取締役及び社外監査役

当社の社外取締役は2名、社外監査役は2名である。

社外取締役の川口哲郎は、長年行政機関の要職を歴任し幅広い経験と知見を基に、経営への監督と提言をして頂くことができることから社外取締役として選任している。当社との間には特別な利害関係はなく、独立性を有していると考えている。

社外取締役の垣鏑公良は、弁護士としての専門的な知識と経験を基に、経営への監督と提言をして頂くことができることから社外取締役として選任している。当社との間には特別な利害関係はなく、独立性を有していると考えている。

社外監査役の橋本一男は、他企業にて要職を歴任、専門的な知識、豊富な経験により監査体制強化を図るため選任している。当社との間には人的関係、資本関係及び特別な利害関係はなく、独立性を有していると考えている。

なお、同氏は過去において当社の主要な株主であるあいおい損害保険㈱（現あいおいニッセイ同和損害保険㈱）の業務執行者であり、平成30年3月31日現在、同社が当社株式の3.59%を保有する資本関係にあるが、既に退任後相当期間経過しており、出身会社の意向に影響を受ける立場にない。

社外監査役の原田良輔は、金融機関にて要職を歴任、専門的な知識、豊富な経験により監査体制強化を図るため選任している。当社との間には人的関係、資本関係及び特別な利害関係はなく、独立性を有していると考えている。

なお、同氏は過去において当社の主要な取引金融機関である㈱三井住友銀行の業務執行者であるが、既に退任後相当期間経過しており、出身銀行の意向に影響を受ける立場にない。

当社において、社外取締役及び社外監査役を選任するための独立性に関する基準はないものの、東京証券取引所の独立性の判断基準及び専門的な知見に基づく客観的かつ適切な提言、監督又は監査といった機能及び役割が期待され、一般株主と利益相反が生じるおそれがないこと等を参考として選任している。

なお、社外監査役による監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係については、取締役会、監査役会及び内部統制部門会議等において適宜報告及び意見交換がされている。

## 役員報酬等

### 1)役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額(百万円)				対象となる 役員の員数 (人)
		基本報酬	ストック オプション	賞与	退職慰労金	
取締役(社外取締役を除く。)	235	103	-	11	121	6
監査役(社外監査役を除く。)	10	9	-	1	-	1
社外役員	16	16	-	-	-	7

### 2)報酬等の総額が1億円以上である者の報酬等の総額等

氏名	役員区分	会社区分	報酬等の種類別の額(百万円)				報酬等の総額 (百万円)
			基本報酬	ストック オプション	賞与	退職慰労金	
水島久尾	-	-	19	-	1	121	141

(注) 1.報酬等の総額が1億円以上である者に限定して記載している。

2.平成29年6月29日開催の第68回定時株主総会決議に基づき、水島久尾氏に対し特別功労金として121百万円支給している。

### 3)役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針の内容及び決定方法

#### a.取締役の報酬

取締役の報酬及び賞与は、それぞれ株主総会で決議された総額の範囲内で、個々の取締役の職務と責任及び実績に応じて、取締役会において協議して決定している。

#### b.監査役の報酬

監査役の報酬は、株主総会で決議された監査役報酬総額の範囲内で、個々の監査役の職務と責任に応じた報酬額を監査役会において協議して決定している。

株式の保有状況

1)投資株式のうち保有目的が純投資目的以外の目的であるものの銘柄数及び貸借対照表計上額の合計額

47銘柄 6,296百万円

2)保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的  
前事業年度

特定投資株式

銘柄	株式数(株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
京浜急行電鉄(株)	898,912.168	1,098	建設営業取引上の保有
住友不動産(株)	352,000	1,015	建設営業取引上の保有
住友大阪セメント(株)	718,580	332	建設工事取引上の保有
(株)協和エクシオ	167,700	270	建設工事取引上の保有
MS & ADインシュアランスグループホールディングス(株)	69,343	245	建設営業取引上の保有
太平洋セメント(株)	598,750	222	建設工事取引上の保有
(株)横河ブリッジホールディングス	152,300	196	建設工事取引上の保有
日立建機(株)	70,400	195	建設工事取引上の保有
小田急電鉄(株)	72,137	156	建設営業取引上の保有
コムシスホールディングス(株)	77,858.379	154	建設営業取引上の保有
旭コンクリート工業(株)	190,000	132	建設工事取引上の保有
(株)東京エネシス	115,797	110	建設営業取引上の保有
(株)三重銀行	40,500	95	資金調達のための自発的保有
三櫻工業(株)	96,195	80	建設営業取引上の保有
(株)千葉銀行	97,020	69	資金調達のための自発的保有
阪和興業(株)	63,273	50	建設営業取引上の保有
第一生命保険(株)	15,900	31	建設営業取引上の保有
第一交通産業(株)	10,000	17	建設営業取引上の保有
(株)富山第一銀行	30,000	15	資金調達のための自発的保有
日本航空(株)	3,000	10	建設営業取引上の保有
(株)伊予銀行	12,094	9	資金調達のための自発的保有
日本瓦斯(株)	2,253.372	7	建設営業取引上の保有

当事業年度  
特定投資株式

銘柄	株式数(株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
住友不動産(株)	438,000	1,723	建設営業取引上の保有
京浜急行電鉄(株)	454,645.507	841	建設営業取引上の保有
(株)協和エクシオ	167,700	477	建設工事取引上の保有
(株)横河ブリッジホールディングス	152,300	342	建設工事取引上の保有
住友大阪セメント(株)	718,580	339	建設工事取引上の保有
日立建機(株)	70,400	288	建設工事取引上の保有
M S & A Dインシュアランスグループホールディングス(株)	69,343	232	建設営業取引上の保有
太平洋セメント(株)	59,875	231	建設工事取引上の保有
コムシスホールディングス(株)	78,151.763	221	建設営業取引上の保有
小田急電鉄(株)	72,137	155	建設営業取引上の保有
旭コンクリート工業(株)	190,000	139	建設工事取引上の保有
(株)東京エネシス	115,797	138	建設営業取引上の保有
(株)三重銀行	40,500	96	資金調達のための自発的保有
(株)千葉銀行	97,020	82	資金調達のための自発的保有
三櫻工業(株)	96,195	71	建設営業取引上の保有
阪和興業(株)	12,654	56	建設工事取引上の保有
第一生命保険(株)	15,900	30	建設営業取引上の保有
第一交通産業(株)	20,000	19	建設営業取引上の保有
(株)富山第一銀行	30,000	14	資金調達のための自発的保有
日本航空(株)	3,000	12	建設営業取引上の保有
日本瓦斯(株)	2,429.489	12	建設営業取引上の保有
(株)伊予銀行	12,094	9	資金調達のための自発的保有

3)保有目的が純投資目的である投資株式の前事業年度及び当事業年度における貸借対照表計上額の合計額並びに当事業年度における受取配当金、売却損益及び評価損益の合計額  
該当事項なし。

責任限定契約の内容の概要

1)社外取締役及び監査役

当社と社外取締役及び監査役は、その職務を行うにつき善意でかつ重大な過失がないときは、会社法第423条第1項の賠償責任を、金1,000万円又は会社法第425条第1項第1号及び第2号の合計額のいずれか高い額に限定する契約を締結している。

2)会計監査人

当社と有限責任 あずさ監査法人は、会社法第427条第1項の規定に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しており、当該契約に基づく損害賠償責任限度額は、同法第425条第1項に定める最低責任限度額となっている。

取締役の定数

当社の取締役は10名以内とする旨を定款に定めている。

取締役の選任の決議要件

当社は取締役の選任決議について議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行い、取締役の選任決議は、累積投票によらない旨を定款に定めている。

**株主総会決議事項を取締役会で決議することができる事項**

当社は、以下の株主総会決議事項について取締役会で決議することができる旨を定款に定めている。

1)自己の株式の取得

経済情勢の変化に対応して財務政策等の経営諸施策を機動的に遂行することを可能とするため、会社法第165条第2項の規定に基づき、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる。

2)取締役の責任免除

職務の遂行にあたり期待される役割を十分に発揮できるよう、会社法第426条第1項の規定に基づき、任務を怠ったことによる取締役（取締役であった者を含む。）の損害賠償責任を、法令の限度において、取締役会の決議によって免除することができる。

3)監査役の責任免除

職務の遂行にあたり期待される役割を十分に発揮できるよう、会社法第426条第1項の規定に基づき、任務を怠ったことによる監査役（監査役であった者を含む。）の損害賠償責任を、法令の限度において、取締役会の決議によって免除することができる。

**株主総会の特別決議要件**

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めている。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものである。

**(2)【監査報酬の内容等】**

**【監査公認会計士等に対する報酬の内容】**

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）
提出会社	40	-	45	-
連結子会社	14	-	14	-
計	54	-	59	-

**【その他重要な報酬の内容】**

（前連結会計年度）

該当事項なし。

（当連結会計年度）

該当事項なし。

**【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】**

（前連結会計年度）

該当事項なし。

（当連結会計年度）

該当事項なし。

**【監査報酬の決定方針】**

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬の決定方針については、特に定めていない。

## 第5【経理の状況】

### 1．連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に準拠して作成し、「建設業法施行規則」（昭和24年建設省令第14号）に準じて記載している。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号）第2条の規定に基づき、同規則及び「建設業法施行規則」（昭和24年建設省令第14号）により作成している。

### 2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）の連結財務諸表及び事業年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）の財務諸表について、有限責任 あずさ監査法人により監査を受けている。

### 3．連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っている。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、又は会計基準等の変更等についての確に対応できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、また、定期的に監査法人の主催するセミナー等に参加している。

## 1【連結財務諸表等】

## (1)【連結財務諸表】

## 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金預金	31,612	44,252
受取手形・完成工事未収入金等	67,292	766,028
未成工事支出金等	1,621,125	1,621,374
短期貸付金	19	20
立替金	10,285	7,777
繰延税金資産	745	672
その他	949	1,617
貸倒引当金	162	91
流動資産合計	112,867	122,651
固定資産		
有形固定資産		
建物・構築物	5,156	5,572
機械、運搬具及び工具器具備品	8,799	8,397
土地	5,845	5,358
リース資産	168	172
建設仮勘定	27	1,319
減価償却累計額	11,348	10,950
有形固定資産合計	8,647	9,869
無形固定資産	132	134
投資その他の資産		
投資有価証券	2,356,614	2,357,585
長期貸付金	60	42
繰延税金資産	91	100
その他	960	851
貸倒引当金	142	119
投資その他の資産合計	7,584	8,460
固定資産合計	16,364	18,464
資産合計	129,232	141,115

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
<b>負債の部</b>		
流動負債		
支払手形・工事未払金等	41,496	44,231
短期借入金	1,850	1,850
1年内返済予定の長期借入金	-	3,150
未払法人税等	1,470	2,137
未成工事受入金	9,241	8,933
預り金	10,863	10,739
完成工事補償引当金	399	336
賞与引当金	588	736
工事損失引当金	6,717	6,541
その他	1,266	2,343
流動負債合計	67,894	74,999
固定負債		
長期借入金	3,150	-
繰延税金負債	618	784
退職給付に係る負債	6,294	6,285
訴訟損失引当金	73	-
その他	1,219	1,137
固定負債合計	11,356	8,208
負債合計	79,251	83,207
純資産の部		
株主資本		
資本金	9,030	9,039
資本剰余金	7,960	7,997
利益剰余金	30,867	37,974
自己株式	170	160
株主資本合計	47,687	54,850
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	1,533	2,083
繰延ヘッジ損益	103	257
為替換算調整勘定	25	22
退職給付に係る調整累計額	269	179
その他の包括利益累計額合計	1,342	2,139
新株予約権	610	545
非支配株主持分	340	372
純資産合計	49,981	57,908
負債純資産合計	129,232	141,115

## 【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

## 【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
売上高	2 143,613	1, 2 149,649
売上原価	3 128,398	1, 3 133,266
売上総利益	15,214	16,382
販売費及び一般管理費	4, 5 5,167	4, 5 5,155
営業利益	10,047	11,227
営業外収益		
受取利息	6	24
受取配当金	77	96
為替差益	91	-
その他	52	98
営業外収益合計	227	218
営業外費用		
支払利息	39	34
支払保証料	69	66
支払手数料	30	74
為替差損	-	10
その他	4	11
営業外費用合計	143	197
経常利益	10,131	11,248
特別利益		
固定資産売却益	6 2	6 127
訴訟損失引当金戻入額	128	-
工事損失引当金戻入額	-	67
特別利益合計	131	195
特別損失		
固定資産除売却損	7 16	7 10
訴訟関連損失	8 25	8 43
投資有価証券評価損	-	54
工事損失引当金繰入額	307	-
役員退職慰労金	-	129
その他	0	12
特別損失合計	350	249
税金等調整前当期純利益	9,911	11,193
法人税、住民税及び事業税	2,886	3,358
法人税等調整額	40	82
法人税等合計	2,846	3,275
当期純利益	7,065	7,917
非支配株主に帰属する当期純利益	27	34
親会社株主に帰属する当期純利益	7,037	7,883

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
当期純利益	7,065	7,917
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	337	549
繰延ヘッジ損益	64	154
為替換算調整勘定	1	3
退職給付に係る調整額	110	89
その他の包括利益合計	1,514	1,796
包括利益	7,580	8,714
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	7,552	8,680
非支配株主に係る包括利益	28	34

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自平成28年4月1日 至平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	9,030	7,955	24,261	163	41,082
当期変動額					
新株の発行					-
剰余金の配当			431		431
親会社株主に帰属する当期純利益			7,037		7,037
自己株式の取得				8	8
自己株式の処分		5		2	7
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					-
当期変動額合計	-	5	6,605	6	6,604
当期末残高	9,030	7,960	30,867	170	47,687

	その他の包括利益累計額					新株予約権	非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	為替換算調整勘定	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計			
当期首残高	1,196	38	27	379	827	400	314	42,626
当期変動額								
新株の発行								-
剰余金の配当								431
親会社株主に帰属する当期純利益								7,037
自己株式の取得								8
自己株式の処分								7
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	337	64	1	110	514	209	26	750
当期変動額合計	337	64	1	110	514	209	26	7,355
当期末残高	1,533	103	25	269	1,342	610	340	49,981

当連結会計年度（自平成29年4月1日 至平成30年3月31日）

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	9,030	7,960	30,867	170	47,687
当期変動額					
新株の発行	9	9			19
剰余金の配当			776		776
親会社株主に帰属する当期純利益			7,883		7,883
自己株式の取得				8	8
自己株式の処分		26		18	45
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					-
当期変動額合計	9	36	7,106	9	7,163
当期末残高	9,039	7,997	37,974	160	54,850

	その他の包括利益累計額					新株予約権	非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	為替換算調整勘定	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計			
当期首残高	1,533	103	25	269	1,342	610	340	49,981
当期変動額								
新株の発行								19
剰余金の配当								776
親会社株主に帰属する当期純利益								7,883
自己株式の取得								8
自己株式の処分								45
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	549	154	3	89	796	64	31	763
当期変動額合計	549	154	3	89	796	64	31	7,926
当期末残高	2,083	257	22	179	2,139	545	372	57,908

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>		
税金等調整前当期純利益	9,911	11,193
減価償却費	438	498
株式報酬費用	216	-
訴訟関連損失	25	43
貸倒引当金の増減額（は減少）	616	94
完成工事補償引当金の増減額（は減少）	42	63
賞与引当金の増減額（は減少）	93	148
退職給付に係る負債の増減額（は減少）	34	9
工事損失引当金の増減額（は減少）	229	175
固定資産除売却損益（は益）	14	116
受取利息及び受取配当金	83	120
支払利息	39	34
為替差損益（は益）	36	10
投資有価証券評価損益（は益）	-	54
売上債権の増減額（は増加）	4,711	1,294
たな卸資産の増減額（は増加）	777	249
仕入債務の増減額（は減少）	1,390	2,723
未成工事受入金の増減額（は減少）	3,580	308
その他の資産の増減額（は増加）	4,121	2,085
その他の負債の増減額（は減少）	3,083	626
その他の損益（は益）	59	161
小計	6,030	17,715
利息及び配当金の受取額	82	120
利息の支払額	41	34
法人税等の支払額	3,982	2,668
訴訟関連損失の支払額	26	122
営業活動によるキャッシュ・フロー	2,062	15,010

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>		
定期預金の預入による支出	109	124
定期預金の払戻による収入	118	124
有形固定資産の取得による支出	1,300	1,879
有形固定資産の売却による収入	6	628
無形固定資産の取得による支出	15	28
投資有価証券の取得による支出	449	321
投資有価証券の売却による収入	101	99
短期貸付金の増減額（は増加）	6	4
長期貸付けによる支出	1	2
長期貸付金の回収による収入	20	17
投資活動によるキャッシュ・フロー	1,621	1,480
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>		
長期借入れによる収入	3,150	-
長期借入金の返済による支出	3,150	-
自己株式の取得による支出	8	8
自己株式の処分による収入	0	0
配当金の支払額	429	774
非支配株主への配当金の支払額	1	2
リース債務の返済による支出	22	7
その他	33	81
財務活動によるキャッシュ・フロー	496	874
現金及び現金同等物に係る換算差額	15	16
現金及び現金同等物の増減額（は減少）	40	12,639
現金及び現金同等物の期首残高	31,633	31,592
現金及び現金同等物の期末残高	1 31,592	1 44,232

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

連結子会社数 8社  
主要な連結子会社名  
株式会社森本組  
大豊塗装工業株式会社  
大豊不動産株式会社  
進和機工株式会社  
タイ大豊株式会社

主要な非連結子会社名

マダガスカル大豊株式会社

非連結子会社は、いずれも小規模会社であり、合計の総資産、売上高、当期純損益（持分に見合う額）及び利益剰余金（持分に見合う額）等は、いずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないため、連結の範囲から除外している。

2. 持分法の適用に関する事項

持分法を適用している非連結子会社及び関連会社はない。

持分法非適用の主要な非連結子会社名

マダガスカル大豊株式会社

持分法非適用の非連結子会社は、それぞれ親会社株主に帰属する当期純損益及び利益剰余金等に及ぼす影響が軽微であり、かつ全体としても重要性がないため、持分法の適用から除外している。なお、持分法非適用の関連会社はない。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の事業年度は連結財務諸表提出会社と同一である。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

連結決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は主として移動平均法により算定）

時価のないもの

移動平均法による原価法

デリバティブ

時価法

運用目的の金銭の信託

時価法

たな卸資産

未成工事支出金

個別法による原価法

不動産事業支出金

個別法による原価法

（収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）

材料貯蔵品

個別法による原価法

（収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産（リース資産を除く）

定率法

ただし、平成10年4月1日以降に取得した建物（建物附属設備を除く）並びに平成28年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については定額法によっている。

なお、主な耐用年数は次のとおりである。

建物・構築物 3～50年

機械、運搬具及び工具器具備品 2～20年

無形固定資産（リース資産を除く）

定額法

なお、耐用年数については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっている。

ただし、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法を採用している。

リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用している。

(3) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上している。

完成工事補償引当金

完成工事に係るかし担保の費用に備えるため、過去の補償工事の実績を基礎に将来の補償工事の見込額を加味して計上している。

賞与引当金

従業員に支給する賞与に備えるため、賞与支給見込額のうち当連結会計年度負担分を計上している。

工事損失引当金

受注工事の損失に備えるため、発生する工事原価の見積額が受注額を超過することが確実視され、かつ、その金額を合理的に見積ることができる工事について、翌連結会計年度以降に発生が見込まれる損失額を計上している。

訴訟損失引当金

訴訟に対する損失に備えるため、損失見込額を計上している。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっている。

数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の日翌連結会計年度から費用処理している。

小規模企業等における簡便法の採用

一部の連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用している。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

完成工事高及び完成工事原価の計上基準

完成工事高の計上は、当連結会計年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事については工事進行基準（工事進捗率の見積りは原価比例法）を、その他の工事については工事完成基準を適用している。

(6) 重要なヘッジ会計の方法

ヘッジ会計の方法

原則として繰延ヘッジ処理によっている。なお、振当処理の要件を満たしている為替予約等は振当処理によっている。

ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段

為替予約、外貨建預金

ヘッジ対象

外貨建金銭債務、外貨建予定取引

ヘッジ方針

外貨建取引の為替相場の変動リスクを回避する目的で為替予約取引を行っており、ヘッジ対象の識別は個別契約毎に行っている。

ヘッジ有効性評価の方法

デリバティブ取引の実行にあたり、ヘッジ手段とヘッジ対象に関する重要な条件がほぼ一致しており、ヘッジ開始時及びその後も継続して相場変動等を相殺することができることを確認している。また、予定取引については実行可能性が極めて高いかどうかの判断を行っている。

(7) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金（現金及び現金同等物）は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ価値の変動について僅少なりスクしか負わない取得日から3か月以内に償還期限の到来する短期投資からなる。

(8) その他

消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税に相当する額の会計処理は、税抜方式によっており、控除対象外消費税及び地方消費税は、当連結会計年度の費用として処理している。

( 会計方針の変更 )  
該当事項はない。

( 未適用の会計基準等 )

- ・ 「収益認識に関する会計基準」( 企業会計基準第29号 平成30年 3月30日 企業会計基準委員会 )
- ・ 「収益認識に関する会計基準の適用指針」( 企業会計基準適用指針第30号 平成30年 3月30日 企業会計基準委員会 )

#### (1) 概要

国際会計基準審議会( IASB )及び米国財務会計基準審議会( FASB )は、共同して収益認識に関する包括的な会計基準の開発を行い、平成26年 5月に「顧客との契約から生じる収益」( IASBにおいてはIFRS第15号、FASBにおいてはTopic606 )を公表しており、IFRS第15号は平成30年 1月 1日以後開始する事業年度から、Topic606は平成29年12月15日より後に開始する事業年度から適用される状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、収益認識に関する包括的な会計基準が開発され、適用指針と合わせて公表されたものである。

企業会計基準委員会の収益認識に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、IFRS第15号と整合性を図る便益の 1つである財務諸表間の比較可能性の観点から、IFRS第15号の基本的な原則を取り入れることを出発点とし、会計基準を定めることとされ、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮すべき項目がある場合には、比較可能性を損なわせない範囲で代替的な取扱いを追加することとされている。

#### (2) 適用予定日

平成34年 3月期の期首から適用する。

#### (3) 当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中である。

(連結貸借対照表関係)

1 未成工事支出金等の内訳

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
未成工事支出金	2,033百万円	2,292百万円
不動産事業支出金	26	7
材料貯蔵品	65	74

2 非連結子会社に対するものは、次のとおりである。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
投資有価証券(株式)	0百万円	0百万円

3 担保に供している資産は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
投資有価証券	10百万円	10百万円

4 偶発債務(債務保証)

分譲代金の前金返還に対する連帯保証

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
(株)タカラレーベン	569百万円	(株)モリモト 263百万円
(株)フクダ不動産	150	(株)タカラレーベン東北 196
(株)モリモト	53	(株)コーセーアールイー 36
(株)タカラレーベン東北	51	
第一交通産業(株)	6	
合計	830	合計 496

事業資金の借入金に対する連帯保証

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
ホテル朱鷺メッセ(株)	25百万円	21百万円

マンション購入者の借入金に対する連帯保証

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
マンション購入者3件	8百万円	7百万円

5 消費貸借契約により貸し付けている投資有価証券

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
	1,422百万円	1,521百万円

6 損失の発生が見込まれる工事契約に係る未成工事支出金と工事損失引当金は、相殺せずに両建てで表示している。

工事損失引当金に対応する未成工事支出金の額

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
	291百万円	2百万円

7 連結会計年度末日満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理をしている。なお、当連結会計年度末日が金融機関の休業日であったため、次の期末日満期手形が連結会計年度末残高に含まれている。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
受取手形	-百万円	36百万円

(連結損益計算書関係)

1 不正取引に伴う過年度連結財務諸表への影響額である売上高の減少額33百万円、売上原価の増加額55百万円が含まれている。

2 工事進行基準による完成工事高は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
	128,075百万円	130,700百万円

3 売上原価に含まれている工事損失引当金繰入額は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
	210百万円	406百万円

4 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
従業員給料手当	2,160百万円	2,372百万円
退職給付費用	141	153
賞与引当金繰入額	106	136
貸倒引当金繰入額	1	71

5 研究開発費

一般管理費に含まれる研究開発費の総額は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
	51百万円	58百万円

6 固定資産売却益の内訳は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
機械、運搬具及び工具器具備品	2百万円	1百万円
土地	-	126
合計	2	127

7 固定資産除売却損の内訳は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
建物・構築物	0百万円	0百万円
機械、運搬具及び工具器具備品	15	10
ソフトウェア	-	0
合計	16	10

8 訴訟関連損失の内訳は、次のとおりである。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
和解金	6百万円	33百万円
その他	18	10
合計	25	43

(連結包括利益計算書関係)

1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	487百万円	749百万円
組替調整額	1	43
税効果調整前	486	793
税効果額	148	243
その他有価証券評価差額金	337	549
繰延ヘッジ損益：		
当期発生額	93	222
組替調整額	-	-
税効果調整前	93	222
税効果額	28	67
繰延ヘッジ損益	64	154
為替換算調整勘定：		
当期発生額	1	3
組替調整額	-	-
税効果調整前	1	3
税効果額	-	-
為替換算調整勘定	1	3
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	52	13
組替調整額	58	76
税効果調整前	110	89
税効果額	-	-
退職給付に係る調整額	110	89
その他の包括利益合計	514	796

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首株式数(株)	当連結会計年度増加株式数(株)	当連結会計年度減少株式数(株)	当連結会計年度末株式数(株)
発行済株式				
普通株式	87,170,143	-	-	87,170,143
合計	87,170,143	-	-	87,170,143
自己株式				
普通株式(注)1	841,437	16,171	10,800	846,808
合計	841,437	16,171	10,800	846,808

(注)1. 普通株式の自己株式の増加16,171株は、単元未満株式16,171株の買取によるものである。

普通株式の自己株式の減少10,800株は、ストックオプションの行使による減少10,000株、買増請求による減少800株によるものである。

2. 新株予約権等に関する事項

区分	新株予約権の内訳	新株予約権の目的となる株式の種類	新株予約権の目的となる株式の数(株)				当連結会計年度末残高(百万円)
			当連結会計年度期首	当連結会計年度増加	当連結会計年度減少	当連結会計年度末	
提出会社	ストック・オプションとしての新株予約権	-	-	-	-	-	610
	合計	-	-	-	-	-	610

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額(百万円)	1株当たり配当額(円)	基準日	効力発生日
平成28年6月29日 定時株主総会	普通株式	431	5	平成28年3月31日	平成28年6月30日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額(百万円)	配当の原資	1株当たり配当(円)	基準日	効力発生日
平成29年6月29日 定時株主総会	普通株式	776	利益剰余金	9	平成29年3月31日	平成29年6月30日

当連結会計年度（自平成29年4月1日 至平成30年3月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首株式数（株）	当連結会計年度増加株式数（株）	当連結会計年度減少株式数（株）	当連結会計年度末株式数（株）
発行済株式				
普通株式（注）1	87,170,143	40,000	-	87,210,143
合計	87,170,143	40,000	-	87,210,143
自己株式				
普通株式（注）2	846,808	16,055	92,845	770,018
合計	846,808	16,055	92,845	770,018

（注）1. 普通株式の発行済株式総数の増加40,000株は、新株予約権の行使によるものである。

（注）2. 普通株式の自己株式の増加16,055株は、単元未満株式16,055株の買取によるものである。

普通株式の自己株式の減少92,845株は、ストックオプションの行使による減少92,000株、買増請求による減少845株によるものである。

2. 新株予約権等に関する事項

区分	新株予約権の内訳	新株予約権の目的となる株式の種類	新株予約権の目的となる株式の数（株）				当連結会計年度末残高（百万円）
			当連結会計年度期首	当連結会計年度増加	当連結会計年度減少	当連結会計年度末	
提出会社	ストック・オプションとしての新株予約権	-	-	-	-	-	545
	合計	-	-	-	-	-	545

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

（決議）	株式の種類	配当金の総額（百万円）	1株当たり配当額（円）	基準日	効力発生日
平成29年6月29日 定時株主総会	普通株式	776	9	平成29年3月31日	平成29年6月30日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

（決議）	株式の種類	配当金の総額（百万円）	配当の原資	1株当たり配当（円）	基準日	効力発生日
平成30年6月28日 定時株主総会	普通株式	1,296	利益剰余金	15	平成30年3月31日	平成30年6月29日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度	当連結会計年度
	(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
現金預金勘定	31,612百万円	44,252百万円
預入期間が3か月を超える定期預金	20	20
現金及び現金同等物	31,592	44,232

(リース取引関係)

(借主側)

ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

重要性が乏しいため、記載は省略している。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1)金融商品に対する取り組み方針

当社グループは、資金運用については短期的な預金等に限定し、銀行等金融機関からの借入により資金を調達している。

デリバティブは、後述するリスクを回避するために利用しており、投機目的の取引は行わない。

(2)金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である受取手形・完成工事未収入金等は、顧客の信用リスクに晒されている。当該リスクに関しては、取引先ごとに期日管理及び残高管理を行うとともに、主要な取引先の信用状況を適時把握する体制としている。

立替金は、主に工事に係る取引に基づいて発生した受取手形・完成工事未収入金等以外の債権であり、相手先の信用リスクに晒されている。

投資有価証券である株式等は、市場価格の変動リスクに晒されているが、主に業務上の関係を有する企業の株式等であり、定期的に把握された時価が取締役会に報告されている。

営業債務である支払手形・工事未払金等は、そのほとんどが1年以内の支払期日である。

借入金は、主に運転資金に係る資金調達を目的としたものである。

デリバティブ取引は、海外事業に係る為替変動リスクに対するヘッジ取引を目的とした為替予約取引である。

デリバティブ取引の執行・管理については、取引権限を定めた社内規定に従っており、また、デリバティブの利用にあたっては、信用リスクを軽減するために、格付けの高い金融機関とのみ取引を行っている。

なお、ヘッジ会計に関する処理等については、前述の「(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)4.会計方針に関する事項(6)重要なヘッジ会計の方法」に記載している。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は次のとおりである。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含まれていない。(注2)参照)

前連結会計年度(平成29年3月31日)

	連結貸借対照表 計上額(百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1)現金預金	31,612	31,612	-
(2)受取手形・完成工事未収入金等	67,292	67,292	-
(3)短期貸付金	19	19	-
(4)立替金	10,285	10,285	-
(5)投資有価証券 その他有価証券	5,801	5,801	-
(6)長期貸付金 貸倒引当金( 1)	60 41		
	19	19	0
資産計	115,032	115,032	0
(1)支払手形・工事未払金等	41,496	41,496	-
(2)短期借入金	1,850	1,850	-
(3)預り金	10,863	10,863	-
(4)長期借入金	3,150	3,134	15
負債計	57,359	57,344	15
デリバティブ取引( 2)	138	138	-

当連結会計年度（平成30年3月31日）

	連結貸借対照表 計上額（百万円）	時価 （百万円）	差額 （百万円）
(1)現金預金	44,252	44,252	-
(2)受取手形・完成工事未収入金等	66,028	66,028	-
(3)短期貸付金	20	20	-
(4)立替金	7,777	7,777	-
(5)投資有価証券 その他有価証券	6,772	6,772	-
(6)長期貸付金	42		
貸倒引当金( 1 )	26		
	15	15	0
資産計	124,866	124,866	0
(1)支払手形・工事未払金等	44,231	44,231	-
(2)短期借入金	1,850	1,850	-
(3)1年内返済予定の長期借入金	3,150	3,150	-
(4)預り金	10,739	10,739	-
負債計	59,970	59,970	-
デリバティブ取引( 2 )	152	152	-

( 1 ) 個別に計上している貸倒引当金である。

( 2 ) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示している。

(注1) 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

#### 資産

(1)現金預金、(2)受取手形・完成工事未収入金等、(3)短期貸付金並びに(4)立替金

これらは、短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっている。

(5)投資有価証券

投資有価証券の時価について、株式等は取引所の価格によっており、債券等は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっている。

(6)長期貸付金

長期貸付金については、一定の期間ごとに分類し、その将来キャッシュ・フローを国債の利回り等適切な指標に信用スプレッドを上乗せした利率で割り引いた現在価値により算定している。また、貸倒懸念債権については、同様の割引率による見積りキャッシュ・フローの割引現在価値、又は、担保及び保証による回収見込額等により、時価を算定している。但し、従業員貸付金については回収可能性を反映した元利金の受取見込額を残存期間に対応する安全性の高い利率で割り引いた現在価値により算定している。

#### 負債

(1)支払手形・工事未払金等、(2)短期借入金、(3)1年内返済予定の長期借入金並びに(4)預り金

これらは、短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっている。

#### デリバティブ取引

取引を約定した金融機関等から当該取引について提示された価格によっている。

(注2) 非上場株式等は、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積ることが出来ず、時価を把握することが極めて困難と認められるため、「(5)投資有価証券 其他有価証券」には含めていない。

区分	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
非上場株式等(百万円)	813	813

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額  
前連結会計年度(平成29年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超5年以内 (百万円)	5年超10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金預金	31,612	-	-	-
受取手形・完成工事未収入金等	67,292	-	-	-
短期貸付金	19	-	-	-
立替金	10,285	-	-	-
投資有価証券 其他有価証券のうち 満期のあるもの(国債)	-	-	10	-
長期貸付金	-	13	5	-
合計	109,210	13	15	-

(注) 長期貸付金のうち、償還予定の計画がないものは上記の表に含まれていない。

当連結会計年度(平成30年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超5年以内 (百万円)	5年超10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金預金	44,252	-	-	-
受取手形・完成工事未収入金等	66,028	-	-	-
短期貸付金	20	-	-	-
立替金	7,777	-	-	-
投資有価証券 其他有価証券のうち 満期のあるもの(国債)	-	-	10	-
長期貸付金	-	11	4	-
合計	118,077	11	14	-

(注) 長期貸付金のうち、償還予定の計画がないものは上記の表に含まれていない。

(注4) その他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額  
前連結会計年度(平成29年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	1,850	-	-	-	-	-
長期借入金	-	3,150	-	-	-	-
合計	1,850	3,150	-	-	-	-

当連結会計年度(平成30年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	1,850	-	-	-	-	-
1年内返済予定の長期借入金	3,150	-	-	-	-	-
合計	5,000	-	-	-	-	-

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度(平成29年3月31日)

種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価(百万円)	差額(百万円)
(1) 連結貸借対照表計上額が取得 原価を超えるもの			
株式	5,166	2,878	2,287
債券			
国債・地方債等	10	10	0
社債	-	-	-
その他	78	66	12
小計	5,255	2,955	2,300
(2) 連結貸借対照表計上額が取得 原価を超えないもの			
株式	450	530	79
債券			
国債・地方債等	-	-	-
社債	-	-	-
その他	95	101	5
小計	546	631	85
合計	5,801	3,586	2,215

当連結会計年度(平成30年3月31日)

種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価(百万円)	差額(百万円)
(1) 連結貸借対照表計上額が取得 原価を超えるもの			
株式	6,395	3,386	3,009
債券			
国債・地方債等	10	10	0
社債	-	-	-
その他	78	58	19
小計	6,560	3,529	3,031
(2) 連結貸借対照表計上額が取得 原価を超えないもの			
株式	191	214	22
債券			
国債・地方債等	-	-	-
社債	-	-	-
その他	20	21	0
小計	211	235	23
合計	6,772	3,764	3,008

2. 売却したその他有価証券

前連結会計年度（自平成28年4月1日 至平成29年3月31日）

種類	売却額（百万円）	売却益の合計額 （百万円）	売却損の合計額 （百万円）
株式	-	-	-
債券			
国債・地方債等	-	-	-
社債	-	-	-
その他	-	-	-
その他	101	1	-
合計	101	1	-

当連結会計年度（自平成29年4月1日 至平成30年3月31日）

種類	売却額（百万円）	売却益の合計額 （百万円）	売却損の合計額 （百万円）
株式	0	0	-
債券			
国債・地方債等	-	-	-
社債	-	-	-
その他	-	-	-
その他	99	13	1
合計	99	13	1

3. 減損処理を行ったその他有価証券

前連結会計年度（自平成28年4月1日 至平成29年3月31日）

該当事項なし。

当連結会計年度（自平成29年4月1日 至平成30年3月31日）

当連結会計年度において、その他有価証券の株式について54百万円の減損処理を行っている。

なお、減損処理にあたっては、期末における時価が取得原価に比べ50%以上下落した場合には全て減損処理を行い、30～50%程度下落した場合には、回復可能性等を考慮して必要と認められた額について減損処理を行っている。

(デリバティブ取引関係)

前連結会計年度(平成29年3月31日)

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引  
該当事項なし。
2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引  
通貨関連

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)
為替予約の 振当処理	為替予約 買建 ユーロ	外貨建予定取引	2,943	1,025	138

(注) 1. 時価の算定方法 先物為替相場によっている。

当連結会計年度(平成30年3月31日)

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引  
該当事項なし。
2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引  
通貨関連

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)
為替予約の 振当処理	為替予約 買建 ユーロ	外貨建予定取引	1,025	398	152

(注) 1. 時価の算定方法 先物為替相場によっている。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

連結財務諸表提出会社及び一部の連結子会社は確定拠出年金制度の他、非積立型の確定給付型の制度としてポイント制に基づく退職一時金制度を採用している。

一部の連結子会社は、確定給付型の制度としての退職一時金制度を採用している。

2. 確定給付制度

(1)退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度	当連結会計年度
	(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
退職給付債務の期首残高	6,260百万円	6,294百万円
勤務費用	531	539
利息費用	51	51
数理計算上の差異の発生額	52	13
退職給付の支払額	494	586
退職給付債務の期末残高	6,294	6,285

(注)簡便法を適用した制度を含む。

(2)年金資産の期首残高と期末残高の調整表

該当事項なし。

(3)退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度	当連結会計年度
	(平成29年3月31日)	(平成30年3月31日)
非積立型制度の退職給付債務	6,294百万円	6,285百万円
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	6,294	6,285
退職給付に係る負債	6,294	6,285
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	6,294	6,285

(注)簡便法を適用した制度を含む。

(4)退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度	当連結会計年度
	(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
勤務費用	531百万円	539百万円
利息費用	51	51
数理計算上の差異の費用処理額	58	76
確定給付制度に係る退職給付費用	641	667

(注)簡便法を採用している連結子会社の退職給付費用は、勤務費用に計上している。

(5)退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりである。

	前連結会計年度	当連結会計年度
	(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
数理計算上の差異	110百万円	89百万円
合計	110	89

(6)退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりである。

	前連結会計年度	当連結会計年度
	(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
未認識数理計算上の差異	269百万円	179百万円
合計	269	179

(7)年金資産に関する事項

該当事項なし。

(8)数理計算上の計算基礎に関する事項

当連結会計年度末における主要な数理計算上の計算基礎

	前連結会計年度	当連結会計年度
	(平成29年3月31日)	(平成30年3月31日)
割引率	0.8～1.0%	0.8～1.0%

3. 確定拠出制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度172百万円、当連結会計年度178百万円である。

(ストック・オプション等関係)

1. スtock・オプションに係る費用計上額及び科目名

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年 4月 1日 至 平成29年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4月 1日 至 平成30年 3月31日)
売上原価の株式報酬費	-	-
一般管理費の株式報酬費	216	-

2. スtock・オプションの内容、規模及びその変動状況

(1) スtock・オプションの内容

	2014年度株式報酬型新株予約権	2015年度株式報酬型新株予約権	2016年度株式報酬型新株予約権
付与対象者の区分及び人数	当社取締役 7名 当社執行役員 8名	当社取締役 7名 当社執行役員 11名	当社取締役 7名 当社執行役員 11名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)	普通株式 264,000株	普通株式 533,000株	普通株式 445,000株
付与日	平成27年 3月 2日	平成28年 3月 1日	平成29年 3月 1日
権利確定条件	<p>(1) 新株予約権者は、当社の取締役及び執行役員のいずれの地位も喪失した日から1年経過した日の翌日(以下、「権利行使開始日」という。)から9年間に限り、募集新株予約権を行使することができる。</p> <p>(2) 次のいずれかに該当する事由が生じた場合、新株予約権者は、当該新株予約権を行使できない。</p> <p>新株予約権者が、当社の取締役又は執行役員のいずれかに在職している期間中に禁固以上の刑に処せられた場合。</p> <p>新株予約権者又はその法定相続人が、当社所定の書面により新株予約権の全部又は一部を放棄する旨を申し出た場合。</p> <p>(3) 上記(1)にかかわらず、新株予約権者が死亡した場合、新株予約権者の相続人は、当該新株予約権者が死亡した日から6か月間に限り、当該新株予約権を行使することができる(ただし、相続人がかかる期間に死亡した場合の再相続は除く。)</p>	同左	同左
対象勤務期間	特に定めはない。	同左	同左
権利行使期間	自平成27年 3月 3日 至平成47年 3月 2日	自平成28年 3月 2日 至平成48年 3月 1日	自平成29年 3月 2日 至平成49年 3月 1日

(注) 株式数に換算して記載している。

(2) ストック・オプションの規模及びその変動状況

当連結会計年度（平成30年3月期）において存在したストック・オプションを対象とし、ストック・オプションの数については、株式数に換算して記載している。

ストック・オプションの数

	2014年度株式報酬型新株予約権	2015年度株式報酬型新株予約権	2016年度株式報酬型新株予約権
権利確定前 (株)			
前連結会計年度末	235,000	486,000	405,000
付与	-	-	-
失効	-	-	-
権利確定	8,000	18,000	-
未確定残	227,000	468,000	405,000
権利確定後 (株)			
前連結会計年度末	19,000	47,000	40,000
権利確定	8,000	18,000	-
権利行使	27,000	65,000	40,000
失効	-	-	-
未行使残	-	-	-

単価情報

	2014年度株式報酬型新株予約権	2015年度株式報酬型新株予約権	2016年度株式報酬型新株予約権
権利行使価格 (円)	1	1	1
行使時平均株価 (円)	538	538	528
付与日における公正な評価単価 (円)	696	407	487

3. ストック・オプションの権利確定数の見積方法

基本的には、将来の失効数の合理的な見積りは困難であるため、実績の失効数のみ反映させる方法を採用している。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
繰延税金資産		
退職給付に係る負債	1,936百万円	1,932百万円
賞与引当金	208	260
たな卸資産評価損	353	246
減損損失	331	212
新株予約権	186	167
工事損失引当金	220	165
繰越欠損金	184	164
未払事業税	101	123
完成工事補償引当金	123	102
貸倒引当金	91	63
その他	235	392
繰延税金資産小計	3,973	3,830
評価性引当額	2,942	2,728
繰延税金資産合計	1,030	1,101
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	680	924
固定資産圧縮積立金	60	58
営業譲受資産受入差額	18	9
その他	54	121
繰延税金負債合計	813	1,113
繰延税金資産及び繰延税金負債の純額	217	11

(注1) 「たな卸資産評価損」は、保有目的の変更により流動資産から固定資産へ振替えた不動産に係るものである。

(注2) 前連結会計年度及び当連結会計年度における繰延税金資産及び繰延税金負債の純額は、連結貸借対照表の以下の項目に含まれている。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
流動資産 - 繰延税金資産	745百万円	672百万円
固定資産 - 繰延税金資産	91	100
固定負債 - 繰延税金負債	618	784

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
法定実効税率	30.9%	30.9%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.8	0.7
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	1.6	0.6
住民税均等割等	1.3	1.1
評価性引当額の増減	2.6	1.7
受取配当金連結消去に伴う影響額	1.6	0.6
その他	1.6	1.7
税効果会計適用後の法人税等負担率	28.7	29.3

(資産除去債務関係)

前連結会計年度(自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)

当社及び連結子会社における資産除去債務の総額に重要性が乏しいため、注記を省略した。

当連結会計年度(自平成29年4月1日 至平成30年3月31日)

当社及び連結子会社における資産除去債務の総額に重要性が乏しいため、注記を省略した。

(賃貸等不動産関係)

前連結会計年度(自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)

当社及び連結子会社が所有する賃貸等不動産の総額に重要性が乏しいため、注記を省略した。

当連結会計年度(自平成29年4月1日 至平成30年3月31日)

当社及び連結子会社が所有する賃貸等不動産の総額に重要性が乏しいため、注記を省略した。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものである。

当社グループは、主として土木、建築工事を中心とした建設事業を営んでおり、土木工事全般に関する事業である「土木事業」、建築工事全般に関する事業である「建築事業」及び建設事業以外の事業(不動産の売買、賃貸等や建設用資材の販売、賃貸等に関する事業等)である「その他の事業」の3つを報告セグメントとしている。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額の算定方法

報告されているセグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一である。

報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値である。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度(自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)

(単位:百万円)

	報告セグメント				調整額 (注1・3)	連結財務諸表 計上額 (注2)
	土木事業	建築事業	その他の事業	計		
売上高						
外部顧客に対する売上高	75,141	65,294	3,177	143,613	-	143,613
セグメント間の内部売上高又は振替高	-	6	755	762	762	-
計	75,141	65,301	3,933	144,376	762	143,613
セグメント利益	6,155	3,783	109	10,048	1	10,047
セグメント資産	74,206	53,487	2,939	130,633	1,400	129,232
その他の項目						
減価償却費	296	114	37	449	10	438
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	1,211	120	4	1,337	21	1,315

(注)1. セグメント利益の調整額 1百万円は、セグメント間取引消去である。

2. セグメント利益は、連結損益計算書の営業利益と調整を行っている。

3. すべての資産は各セグメントに配分されているため全社資産はない。

当連結会計年度（自平成29年4月1日 至平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント				調整額 (注1・3)	連結財務諸表 計上額 (注2)
	土木事業	建築事業	その他の事業	計		
売上高						
外部顧客に対する売上高	73,928	71,519	4,201	149,649	-	149,649
セグメント間の内部売上高又は振替高	191	6	2,273	2,471	2,471	-
計	74,120	71,525	6,474	152,120	2,471	149,649
セグメント利益	7,283	3,764	250	11,298	70	11,227
セグメント資産	77,751	62,274	4,121	144,146	3,030	141,115
その他の項目						
減価償却費	382	103	27	513	15	498
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	1,644	532	6	2,183	275	1,907

- (注) 1. セグメント利益の調整額 70百万円は、セグメント間取引消去である。  
2. セグメント利益は、連結損益計算書の営業利益と調整を行っている。  
3. すべての資産は各セグメントに配分されているため全社資産はない。

【関連情報】

前連結会計年度（自平成28年4月1日 至平成29年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報  
セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略した。
2. 地域ごとの情報
  - (1) 売上高  
本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略した。
  - (2) 有形固定資産  
本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略した。
3. 主要な顧客ごとの情報  
外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載を省略した。

当連結会計年度（自平成29年4月1日 至平成30年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報  
セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略した。
2. 地域ごとの情報
  - (1) 売上高  
本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略した。
  - (2) 有形固定資産  
本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略した。
3. 主要な顧客ごとの情報  
外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載を省略した。

**【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】**

前連結会計年度（自平成28年4月1日 至平成29年3月31日）

当連結会計年度においては、重要な減損損失はない。

当連結会計年度（自平成29年4月1日 至平成30年3月31日）

当連結会計年度においては、重要な減損損失はない。

**【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】**

前連結会計年度（自平成28年4月1日 至平成29年3月31日）

該当事項なし。

当連結会計年度（自平成29年4月1日 至平成30年3月31日）

該当事項なし。

**【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】**

前連結会計年度（自平成28年4月1日 至平成29年3月31日）

該当事項なし。

当連結会計年度（自平成29年4月1日 至平成30年3月31日）

該当事項なし。

**【関連当事者情報】**

前連結会計年度（自平成28年4月1日 至平成29年3月31日）

該当事項なし。

当連結会計年度（自平成29年4月1日 至平成30年3月31日）

該当事項なし。

( 1株当たり情報 )

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
1株当たり純資産額(円)	567.98	659.30
1株当たり当期純利益(円)	81.53	91.25
潜在株式調整後1株当たり当期純利益(円)	80.75	90.05

(注) 1株当たり当期純利益及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりです。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
1株当たり当期純利益		
親会社株主に帰属する当期純利益(百万円)	7,037	7,883
普通株主に帰属しない金額(百万円)	-	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益(百万円)	7,037	7,883
期中平均株式数(千株)	86,323	86,397
潜在株式調整後1株当たり当期純利益		
普通株式増加数(千株)	831	1,145
(うち新株予約権(千株))	(831)	(1,145)

(重要な後発事象)

(株式併合、単元株式数の変更及び発行可能株式総数の変更)

当社は、平成30年5月11日開催の取締役会において、単元株式数の変更及び定款の一部変更について決議するとともに、平成30年6月28日開催の第69回定時株主総会に株式併合に関する議案を付議することを決議し、同株主総会において承認された。

(1) 株式併合及び単元株式数の変更の目的

全国証券取引所は、「売買単位の集約に向けた行動計画」を発表し、平成30年10月1日までに全ての国内上場会社の普通株式の売買単位(単元株式)を100株に統一することを目指している。

当社は、東京証券取引所に上場する会社として、この趣旨を尊重し、当社普通株式の売買単位を1,000株から100株に変更することとし、併せて、証券取引所が望ましいとしている投資単位の金額水準(5万円以上50万円未満)を勘案し、株式併合を実施するものである。

(2) 株式併合の内容

株式併合する株式の種類

普通株式

株式併合の方法・比率

平成30年10月1日付で、平成30年9月30日の最終の株主名簿に記載された株主の所有株式数を普通株式5株につき1株の割合で併合する。

株式併合により減少する株式数

株式併合前の発行済株式総数(平成30年3月31日現在)	87,210,143株
株式併合により減少する株式数	69,768,115株
株式併合後の発行済株式総数	17,442,028株

(注)「株式併合により減少する株式数」及び「株式併合後の発行済株式総数」は、併合前の発行済株式総数及び併合割合に基づき算出した理論値である。

1株未満の端数が生じる場合の処理

株式併合の結果、1株に満たない端数が生じた場合には、会社法第235条により、一括して処分し、その処分代金を端数が生じた株主に対して、端数の割合に応じて分配する。

(3) 単元株式数の変更の内容

株式併合の効力発生と同時に、普通株式の単元株式数を1,000株から100株に変更する。

(4) 発行可能株式総数の変更の内容

株式併合の割合に応じて、効力発生日(平成30年10月1日)における当社の発行可能株式総数を1億6千万株から3千2百万株に変更する。

なお、発行可能株式総数を定める定款の規定については、会社法第182条第2項に基づき、同日に変更したものとみなされる。

(5) 株式併合及び単元株式数の変更の日程

取締役会決議日	平成30年5月11日
株主総会決議日	平成30年6月28日
株式併合及び単元株式数の変更	平成30年10月1日

(6) 1株当たり情報に及ぼす影響

当該株式併合が前連結会計年度の期首に実施されたと仮定した場合の、前連結会計年度及び当連結会計年度における1株当たり情報は以下のとおりである。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
1株当たり純資産額	2,839円90銭	3,296円48銭
1株当たり当期純利益金額	407円63銭	456円24銭
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額	403円74銭	450円27銭

【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項なし。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	1,850	1,850	0.5	
1年以内に返済予定の長期借入金	-	3,150	0.8	平成30年8月
1年以内に返済予定のリース債務	10	5		
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く)	8	5		平成34年1月
長期借入金	3,150	-		
合計	5,018	5,011		

(注) 1. 「平均利率」については、期末借入金残高に対する加重平均利率を記載している。

なお、リース債務の「平均利率」については、リース料総額に含まれる利息相当額を定額法により各連結会計年度に配分しているため、記載していない。

2. リース債務(1年以内に返済予定のものを除く)の連結決算日後5年内における返済予定額は以下のとおりである。

	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内
リース債務(百万円)	3	1	0	-

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により記載を省略した。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(百万円)	31,430	64,730	106,359	149,649
税金等調整前四半期(当期)純利益(百万円)	1,322	3,147	8,633	11,193
親会社株主に帰属する四半期(当期)純利益金額(百万円)	1,087	2,343	6,052	7,883
1株当たり四半期(当期)純利益金額(円)	12.59	27.14	70.07	91.25

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額(円)	12.59	14.54	42.91	21.18

## 2【財務諸表等】

## (1)【財務諸表】

## 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
<b>資産の部</b>		
<b>流動資産</b>		
現金預金	22,025	28,710
受取手形	4,203	3 5,407
完成工事未収入金	43,998	45,376
未成工事支出金等	1,326	1,865
短期貸付金	275	354
立替金	10,345	7,725
繰延税金資産	470	494
その他	764	921
貸倒引当金	157	87
流動資産合計	83,252	90,768
<b>固定資産</b>		
<b>有形固定資産</b>		
建物・構築物	4,656	5,056
減価償却累計額	2,858	2,915
建物・構築物(純額)	1,798	2,141
機械・運搬具	6,485	6,047
減価償却累計額	5,847	5,308
機械・運搬具(純額)	638	739
工具器具・備品	1,265	1,265
減価償却累計額	1,172	1,178
工具器具・備品(純額)	93	86
土地	5,721	5,229
リース資産	144	144
減価償却累計額	129	137
リース資産(純額)	15	7
建設仮勘定	27	1,615
有形固定資産合計	8,293	9,819
<b>無形固定資産</b>		
借地権	11	11
ソフトウェア	38	39
リース資産	0	0
その他	51	51
無形固定資産合計	101	102
<b>投資その他の資産</b>		
投資有価証券	2 5,448	2 6,395
関係会社株式	2,134	2,134
関係会社長期貸付金	434	434
長期前払費用	0	0
その他	630	555
貸倒引当金	130	114
投資その他の資産合計	8,517	9,406
固定資産合計	16,912	19,327
資産合計	100,164	110,095

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
<b>負債の部</b>		
<b>流動負債</b>		
支払手形	6,351	6,805
工事未払金	23,544	24,708
短期借入金	1,850	1,850
1年内返済予定の長期借入金	-	3,150
リース債務	8	4
未払法人税等	722	1,531
未成工事受入金	7,358	6,545
預り金	8,954	10,828
完成工事補償引当金	343	279
賞与引当金	399	500
工事損失引当金	165	185
その他	489	1,391
流動負債合計	50,189	57,781
<b>固定負債</b>		
長期借入金	3,150	-
リース債務	8	3
繰延税金負債	522	688
退職給付引当金	4,526	4,493
訴訟損失引当金	73	-
資産除去債務	4	5
その他	112	122
固定負債合計	8,397	5,312
負債合計	58,586	63,094
<b>純資産の部</b>		
<b>株主資本</b>		
資本金	9,030	9,039
<b>資本剰余金</b>		
資本準備金	7,540	7,549
その他資本剰余金	420	447
資本剰余金合計	7,960	7,997
<b>利益剰余金</b>		
利益準備金	1,105	1,105
<b>その他利益剰余金</b>		
固定資産圧縮積立金	136	132
別途積立金	6,915	6,915
繰越利益剰余金	14,562	19,345
利益剰余金合計	22,719	27,498
自己株式	170	160
株主資本合計	39,539	44,375
<b>評価・換算差額等</b>		
その他有価証券評価差額金	1,324	1,823
繰延ヘッジ損益	103	257
評価・換算差額等合計	1,428	2,080
新株予約権	610	545
純資産合計	41,578	47,001
負債純資産合計	100,164	110,095

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
売上高		
完成工事高	2 99,295	2 106,452
売上高合計	99,295	1 106,452
売上原価		
完成工事原価	4 90,326	4 95,984
売上原価合計	90,326	1 95,984
売上総利益		
完成工事総利益	8,969	10,467
売上総利益合計	8,969	10,467
販売費及び一般管理費		
役員報酬	167	142
従業員給料手当	1,201	1,323
賞与引当金繰入額	69	88
退職給付費用	93	98
株式報酬費用	216	-
法定福利費	215	233
福利厚生費	43	31
修繕維持費	69	16
事務用品費	32	45
通信交通費	159	165
動力用水光熱費	18	19
調査研究費	56	54
広告宣伝費	15	15
貸倒引当金繰入額	2	71
交際費	58	53
寄付金	10	5
地代家賃	68	75
減価償却費	64	65
租税公課	316	313
保険料	45	47
雑費	267	321
販売費及び一般管理費合計	5 3,192	5 3,045
営業利益	5,776	7,422
営業外収益		
受取利息	25	49
受取配当金	3 562	3 281
為替差益	90	-
その他	41	87
営業外収益合計	720	418
営業外費用		
支払利息	40	35
支払保証料	52	37
支払手数料	30	74
為替差損	-	9
その他	3	11
営業外費用合計	126	166
経常利益	6,369	7,673

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
<b>特別利益</b>		
固定資産売却益	6 2	6 127
訴訟損失引当金戻入額	128	-
特別利益合計	131	127
<b>特別損失</b>		
固定資産除売却損	7 16	7 10
訴訟関連損失	8 19	8 37
役員退職慰労金	-	121
その他	0	12
特別損失合計	36	181
税引前当期純利益	6,464	7,619
法人税、住民税及び事業税	1,620	2,209
法人税等調整額	25	146
法人税等合計	1,595	2,063
当期純利益	4,868	5,555

完成工事原価報告書

区分	注記 番号	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
		金額(百万円)	構成比 (%)	金額(百万円)	構成比 (%)
材料費		19,719	21.8	19,384	20.2
労務費		819	0.9	605	0.6
外注費		56,512	62.6	61,346	63.9
経費 (うち人件費)		13,275 (6,648)	14.7 (7.4)	14,647 (7,164)	15.3 (7.5)
計		90,326	100.0	95,984	100.0

【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自平成28年4月1日 至平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本								自己株式	株主資本合計
	資本金	資本剰余金		利益準備金	利益剰余金					
		資本準備金	その他資本剰余金		その他利益剰余金					
					固定資産圧縮積立金	別途積立金	繰越利益剰余金			
当期首残高	9,030	7,540	415	1,105	140	6,915	10,121	163	35,103	
当期変動額										
新株の発行									-	
固定資産圧縮積立金の取崩					4		4		-	
剰余金の配当							431		431	
当期純利益							4,868		4,868	
自己株式の取得								8	8	
自己株式の処分			5					2	7	
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）									-	
当期変動額合計	-	-	5	-	4	-	4,441	6	4,435	
当期末残高	9,030	7,540	420	1,105	136	6,915	14,562	170	39,539	

	評価・換算差額等			新株予約権	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	評価・換算差額等合計		
当期首残高	978	38	1,016	400	36,521
当期変動額					
新株の発行					-
固定資産圧縮積立金の取崩					-
剰余金の配当					431
当期純利益					4,868
自己株式の取得					8
自己株式の処分					7
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	346	64	411	209	621
当期変動額合計	346	64	411	209	5,056
当期末残高	1,324	103	1,428	610	41,578

当事業年度（自平成29年4月1日 至平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本								
	資本金	資本剰余金		利益剰余金			自己株式	株主資本合計	
		資本準備金	その他資本剰余金	利益準備金	その他利益剰余金				
					固定資産圧縮積立金	別途積立金			繰越利益剰余金
当期首残高	9,030	7,540	420	1,105	136	6,915	14,562	170	39,539
当期変動額									
新株の発行	9	9							19
固定資産圧縮積立金の取崩					4		4		-
剰余金の配当							776		776
当期純利益							5,555		5,555
自己株式の取得								8	8
自己株式の処分			26					18	45
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）									-
当期変動額合計	9	9	26	-	4	-	4,783	9	4,835
当期末残高	9,039	7,549	447	1,105	132	6,915	19,345	160	44,375

	評価・換算差額等			新株予約権	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	評価・換算差額等合計		
当期首残高	1,324	103	1,428	610	41,578
当期変動額					
新株の発行					19
固定資産圧縮積立金の取崩					-
剰余金の配当					776
当期純利益					5,555
自己株式の取得					8
自己株式の処分					45
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	498	154	652	64	587
当期変動額合計	498	154	652	64	5,423
当期末残高	1,823	257	2,080	545	47,001

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

有価証券

子会社株式

移動平均法による原価法

その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）

時価のないもの

移動平均法による原価法

2. デリバティブ等の評価基準及び評価方法

デリバティブ

時価法

運用目的の金銭の信託

時価法

3. たな卸資産の評価基準及び評価方法

未成工事支出金

個別法による原価法

不動産事業支出金

個別法による原価法

（収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）

材料貯蔵品

個別法による原価法

（収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）

4. 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産（リース資産を除く）

定率法

ただし、平成10年4月1日以降に取得した建物（建物附属設備を除く）並びに平成28年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については定額法によっている。

なお、主な耐用年数は次のとおりである。

建物・構築物 3～50年

機械・運搬具 2～15年

工具器具・備品 2～20年

無形固定資産（リース資産を除く）

定額法

なお、耐用年数については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっている。

ただし、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法によっている。

リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用している。

5. 引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上している。

完成工事補償引当金

完成工事に係るかし担保の費用に備えるため、過去の補償工事の実績を基礎に将来の補償工事の見込額を加味して計上している。

賞与引当金

従業員に支給する賞与に備えるため、賞与支給見込額のうち当事業年度負担分を計上している。

工事損失引当金

受注工事の損失に備えるため、発生する工事原価の見積額が受注額を超過することが確実視され、かつ、その金額を合理的に見積ることができる工事について、翌事業年度以降に発生が見込まれる損失額を計上している。

#### 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務の見込額に基づき計上している。

##### 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっている。

##### 数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌事業年度から費用処理している。

##### 訴訟損失引当金

訴訟に対する損失に備えるため、損失見込額を計上している。

#### 6. 完成工事高及び完成工事原価の計上基準

完成工事高の計上は、当事業年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事については工事進行基準（工事の進捗の見積りは原価比例法）を、その他の工事については工事完成基準を適用している。

#### 7. ヘッジ会計の方法

##### ヘッジ会計の方法

原則として繰延ヘッジ処理によっている。なお、振当処理の要件を満たしている為替予約等は振当処理によっている。

##### ヘッジ手段とヘッジ対象

###### ヘッジ手段

為替予約、外貨建預金

###### ヘッジ対象

外貨建金銭債務、外貨建予定取引

##### ヘッジ方針

外貨建取引の為替相場の変動リスクを回避する目的で為替予約取引を行っており、ヘッジ対象の識別は個別契約毎に行っている。

##### ヘッジ有効性評価の方法

デリバティブ取引の実行にあたり、ヘッジ手段とヘッジ対象に関する重要な条件がほぼ一致しており、ヘッジ開始時及びその後も継続して相場変動等を相殺することができることを確認している。また、予定取引については実行可能性が極めて高いかどうかの判断を行っている。

#### 8. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

##### 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異の未処理額の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっている。

##### 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税に相当する額の会計処理は、税抜方式によっており、控除対象外消費税及び地方消費税は、当事業年度の費用として処理している。

#### （会計方針の変更）

該当事項はない。

(貸借対照表関係)

1 偶発債務(債務保証)

分譲代金の前金返還に対する連帯保証

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
(株)タカラレーベン	569百万円	(株)タカラレーベン東北 196百万円
(株)タカラレーベン東北	51	
第一交通産業(株)	6	
合計	627	合計 196

事業資金の借入金に対する連帯保証

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
ホテル朱鷺メッセ(株)	25百万円	21百万円

マンション購入者の借入金に対する連帯保証

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
マンション購入者3件	8百万円	7百万円

2 消費貸借契約により貸し付けている投資有価証券

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
	1,422百万円	1,521百万円

3 事業年度末日満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理をしている。なお、当事業年度末日が金融機関の休業日であったため、次の期末日満期手形が事業年度末残高に含まれている。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
受取手形	-百万円	36百万円

(損益計算書関係)

1 不正取引に伴う過年度財務諸表への影響額である売上高の減少額33百万円、売上原価の増加額55百万円が含まれている。

2 工事進行基準による完成工事高は、次のとおりである。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
	92,883百万円	97,572百万円

3 関係会社との取引にかかるものが次のとおり含まれている。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
受取配当金	500百万円	200百万円

4 完成工事原価に含まれている工事損失引当金繰入額は、次のとおりである。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
	143百万円	179百万円

5 研究開発費

一般管理費に含まれる研究開発費の総額は、次のとおりである。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
研究開発費	51百万円	58百万円

6 固定資産売却益の内訳は、次のとおりである。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
機械・運搬具	2百万円	1百万円
工具器具・備品	0	-
土地	-	126
合計	2	127

7 固定資産除売却損の内訳は、次のとおりである。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
建物・構築物	0百万円	0百万円
機械・運搬具	15	10
工具器具・備品	0	0
ソフトウェア	-	0
合計	16	10

8 訴訟関連損失の内訳は、次のとおりである。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
和解金	5百万円	33百万円
その他	14	4
合計	19	37

(株主資本等変動計算書関係)

前事業年度(自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)

自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当事業年度期首株式数(株)	当事業年度増加株式数(株)	当事業年度減少株式数(株)	当事業年度末株式数(株)
普通株式(注)1、2	841,437	16,171	10,800	846,808
合計	841,437	16,171	10,800	846,808

(注)1. 普通株式の自己株式の増加16,171株は、単元未満株式16,171株の買取によるものである。

(注)2. 普通株式の自己株式の減少10,800株は、ストックオプションの行使による減少10,000株、買増請求による減少800株によるものである。

当事業年度(自平成29年4月1日 至平成30年3月31日)

自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当事業年度期首株式数(株)	当事業年度増加株式数(株)	当事業年度減少株式数(株)	当事業年度末株式数(株)
普通株式(注)1、2	846,808	16,055	92,845	770,018
合計	846,808	16,055	92,845	770,018

(注)1. 普通株式の自己株式の増加16,055株は、単元未満株式16,055株の買取によるものである。

(注)2. 普通株式の自己株式の減少92,845株は、ストックオプションの行使による減少92,000株、買増請求による減少845株によるものである。

(有価証券関係)

前事業年度(平成29年3月31日)

子会社株式(貸借対照表計上額 2,134百万円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載していない。

当事業年度(平成30年3月31日)

子会社株式(貸借対照表計上額 2,134百万円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載していない。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
繰延税金資産		
退職給付引当金	1,386百万円	1,376百万円
たな卸資産評価損	353	246
減損損失	331	212
賞与引当金	141	175
新株予約権	186	167
完成工事補償引当金	106	85
未払事業税	64	85
貸倒引当金	88	61
工事損失引当金	51	56
その他	190	350
繰延税金資産小計	2,900	2,817
評価性引当額	2,260	2,033
繰延税金資産合計	639	783
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	584	804
固定資産圧縮積立金	60	58
その他	47	115
繰延税金負債合計	692	978
繰延税金負債の純額	52	194

(注1) 「たな卸資産評価損」は、保有目的の変更により流動資産から固定資産へ振替えた不動産に係るものである。

(注2) 前事業年度及び当事業年度における繰延税金負債の純額は、貸借対照表の以下の項目に含まれている。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
流動資産 - 繰延税金資産	470百万円	494百万円
固定負債 - 繰延税金負債	522	688

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
法定実効税率	30.9%	30.9%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.8	0.7
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	2.4	0.9
住民税均等割等	1.3	1.1
評価性引当額の増減	3.7	3.0
その他	2.1	1.7
税効果会計適用後の法人税等負担率	24.7	27.1

( 1株当たり情報 )

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
1株当たり純資産額(円)	474.59	537.43
1株当たり当期純利益(円)	56.40	64.31
潜在株式調整後1株当たり当期純利益(円)	55.86	63.47

(注) 1株当たり当期純利益及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりである。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
当期純利益(百万円)	4,868	5,555
普通株主に帰属しない金額(百万円)	-	-
普通株式に係る当期純利益(百万円)	4,868	5,555
期中平均株式数(千株)	86,323	86,397
潜在株式調整後1株当たり当期純利益		
普通株式増加数(千株)	831	1,145
(うち新株予約権(千株))	(831)	(1,145)

(重要な後発事象)

(株式併合、単元株式数の変更及び発行可能株式総数の変更)

当社は、平成30年5月11日開催の取締役会において、単元株式数の変更及び定款の一部変更について決議するとともに、平成30年6月28日開催の第69回定時株主総会に株式併合に関する議案を付議することを決議し、同株主総会において承認された。

(1) 株式併合及び単元株式数の変更の目的

全国証券取引所は、「売買単位の集約に向けた行動計画」を発表し、平成30年10月1日までに全ての国内上場会社の普通株式の売買単位(単元株式)を100株に統一することを目指している。

当社は、東京証券取引所に上場する会社として、この趣旨を尊重し、当社普通株式の売買単位を1,000株から100株に変更することとし、併せて、証券取引所が望ましいとしている投資単位の金額水準(5万円以上50万円未満)を勘案し、株式併合を実施するものである。

(2) 株式併合の内容

株式併合する株式の種類

普通株式

株式併合の方法・比率

平成30年10月1日付で、平成30年9月30日の最終の株主名簿に記載された株主の所有株式数を普通株式5株につき1株の割合で併合する。

株式併合により減少する株式数

株式併合前の発行済株式総数(平成30年3月31日現在)	87,210,143株
株式併合により減少する株式数	69,768,115株
株式併合後の発行済株式総数	17,442,028株

(注)「株式併合により減少する株式数」及び「株式併合後の発行済株式総数」は、併合前の発行済株式総数及び併合割合に基づき算出した理論値である。

1株未満の端数が生じる場合の処理

株式併合の結果、1株に満たない端数が生じた場合には、会社法第235条により、一括して処分し、その処分代金を端数が生じた株主に対して、端数の割合に応じて分配する。

(3) 単元株式数の変更の内容

株式併合の効力発生と同時に、普通株式の単元株式数を1,000株から100株に変更する。

(4) 発行可能株式総数の変更の内容

株式併合の割合に応じて、効力発生日(平成30年10月1日)における当社の発行可能株式総数を1億6千万株から3千2百万株に変更する。

なお、発行可能株式総数を定める定款の規定については、会社法第182条第2項に基づき、同日に変更したものとみなされる。

(5) 株式併合及び単元株式数の変更の日程

取締役会決議日	平成30年5月11日
株主総会決議日	平成30年6月28日
株式併合及び単元株式数の変更	平成30年10月1日

(6) 1株当たり情報に及ぼす影響

当該株式併合が前事業年度の期首に実施されたと仮定した場合の、前事業年度及び当事業年度における1株当たり情報は以下のとおりである。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
1株当たり純資産額	2,372円93銭	2,687円17銭
1株当たり当期純利益金額	282円01銭	321円54銭
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額	279円32銭	317円33銭

【附属明細表】  
【有価証券明細表】  
【株式】

		銘柄	株式数(株)	貸借対照表計上額 (百万円)
投資有価証券	その他 有価証券	住友不動産株	438,000	1,723
		京浜急行電鉄株	454,645.507	841
		株協和エクシオ	167,700	477
		株横河ブリッジホールディングス	152,300	342
		住友大阪セメント株	718,580	339
		日立建機株	70,400	288
		MS & ADインシュアランスグループ ホールディングス株	69,343	232
		太平洋セメント株	59,875	231
		コムシスホールディングス株	78,151.763	221
		首都圏新都市鉄道株	4,000	200
		関西国際空港株	3,200	160
		小田急電鉄株	72,137	155
		旭コンクリート工業株	190,000	139
		株東京エネシス	115,797	138
		東京湾横断道路株	2,000	100
		株三重銀行	40,500	96
		その他31社31銘柄	320,853.489	607
		小計	2,957,482.759	6,296
		計	2,957,482.759	6,296

【債券】  
該当事項なし。

【その他】

		銘柄	投資口数等(口)	貸借対照表計上額 (百万円)
投資有価証券	その他 有価証券	日本好配当リバランスF17 - 2 他2銘柄	-	98

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価償却累計額又は償却累計額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	差引 当期末残高 (百万円)
有形固定資産							
建物・構築物	1,798	434	4	5,056	2,915	86	2,141
機械・運搬具	638	389	14	6,047	5,308	273	739
工具器具・備品	93	45	0	1,265	1,178	51	86
土地	5,721	-	492	5,229	-	-	5,229
リース資産	15	-	-	144	137	8	7
建設仮勘定	27	1,588	-	1,615	-	-	1,615
有形固定資産計	8,293	2,457	511	19,359	9,539	420	9,819
無形固定資産							
借地権	-	-	-	11	-	-	11
ソフトウェア	-	-	-	218	178	15	39
リース資産	-	-	-	36	35	0	0
その他	-	-	-	51	-	-	51
無形固定資産計	-	-	-	316	214	16	102
長期前払費用	0	-	-	0	0	0	0

(注) 1. 当期増減額のうち主なものは次のとおりである。

建物 増加額(百万円) 赤坂ホテル 410

機械・運搬具 増加額(百万円) ドリーム 型ケーソン機材 316

建設仮勘定 増加額(百万円) 新機材センター計上 1,580

土地 減少額(百万円) 赤坂ホテル用地 491

2. 無形固定資産の金額が資産の総額の1%以下であるため、「当期首残高」、「当期増加額」及び「当期減少額」の記載を省略している。

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	287	74	-	160	201
完成工事補償引当金	343	279	343	-	279
賞与引当金	399	500	399	-	500
工事損失引当金	165	179	118	40	185
訴訟損失引当金	73	-	73	-	-

(注) 1. 貸倒引当金の当期減少額のうち、一般債権の貸倒実績率による洗替額144百万円及び貸倒懸念債権等特定の債権回収による取崩額15百万円である。

2. 工事損失引当金の当期減少額のうち、損失見込額が改善したことによる取崩額である。

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略している。

(3) 【その他】

該当事項なし。

## 第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	3月31日
1単元の株式数	1,000株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
取次所	
買取手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
単元未満株式の買増	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
取次所	
買増手数料	株式の売買の委託に係る手数料として別途定める金額
受付停止期間	当社基準日の12営業日前から基準日まで
公告掲載方法	当社の公告方法は、電子公告とする。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行う。 公告掲載URL <a href="http://www.daiho.co.jp">http://www.daiho.co.jp</a>
株主に対する特典	なし

(注) 当社の株主は、その有する単元未満株式について次に掲げる権利以外の権利を行使することができない旨を定款に定めている。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
- (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利
- (4) 株主の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を売渡すことを請求する権利

## 第7【提出会社の参考情報】

### 1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はない。

### 2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から本有価証券報告書提出日までの間において、関東財務局長に提出した金融商品取引法第25条第1項各号に掲げる書類は、次のとおりである。

#### 1．有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度（第68期）（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日） 平成29年6月29日提出

#### 2．内部統制報告書及びその添付書類

事業年度（第68期）（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日） 平成29年6月29日提出

#### 3．四半期報告書及び確認書

（第69期第1四半期）（自 平成29年4月1日 至 平成29年6月30日） 平成29年8月10日提出

（第69期第2四半期）（自 平成29年7月1日 至 平成29年9月30日） 平成29年11月13日提出

（第69期第3四半期）（自 平成29年10月1日 至 平成29年12月31日） 平成30年2月14日提出

#### 4．臨時報告書

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）に基づく臨時報告書 平成29年7月4日提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号（代表取締役の異動）に基づく臨時報告書 平成29年11月13日提出

## 第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項なし。

## 独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成30年6月28日

大豊建設株式会社

取締役会 御中

### 有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員 公認会計士 金子 能周 印  
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 春山 直輝 印  
業務執行社員

#### <財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている大豊建設株式会社の平成29年4月1日から平成30年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

#### 連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

#### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

#### 監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、大豊建設株式会社及び連結子会社の平成30年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### < 内部統制監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、大豊建設株式会社の平成30年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

#### 内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

#### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

#### 監査意見

当監査法人は、大豊建設株式会社が平成30年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

---

上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管している。

X B R L データは監査の対象には含まれていません。

## 独立監査人の監査報告書

平成30年6月28日

大豊建設株式会社

取締役会 御中

### 有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員 公認会計士 金子 能周 印  
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 春山 直輝 印  
業務執行社員

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている大豊建設株式会社の平成29年4月1日から平成30年3月31日までの第69期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

#### 財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

#### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

#### 監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、大豊建設株式会社の平成30年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

---

上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管している。

X B R L データは監査の対象には含まれていません。